

Breek skeneederi

Ellen Bukharin

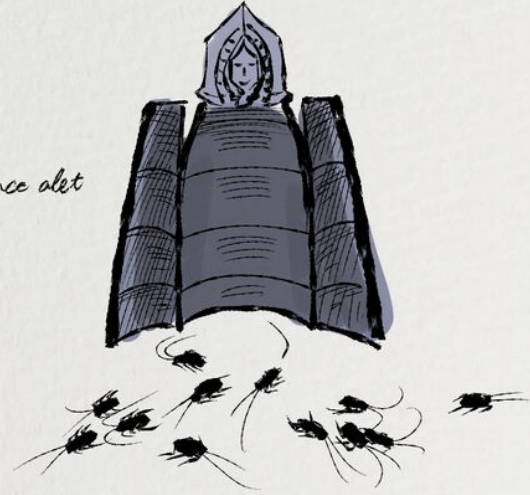
蟲刑人

エレン・ブハーリン

Böcek işkencesi nedir?

Böcek işkencesi,
böceklerin kullanıldığı bir infaz yöntemidir.

işkence alet



蟲刑って何？
蟲刑とは、蟲を使った処刑方法のこと。

Neden bucek kullandiyot?

- (ii) Çünkü herkes böceklerden nefret eder, bu da onları vaskence için nükhetmiş kılabilir.
- (iii) Çünkü böcekleri çok sayıda çoğaltmak kolaydır ve vücutları güçlüdür.
- (iv) Çünkü böcekler insanlara zorbalık yapmanın bilimine de değerli.
- Cellat, bunları kendisi yapmak yerine böcekleri kullanmaya karar vermiştir. Bu celladın zihniyetini göz önünde bulundurmakta oldukları.



なぜ蟲を使うのか？

- ① 蟲はみんな嫌いなので拷問にぴったり。
② 蟲は大量に増やしやすいし、体が丈夫だから。
③ 蟲には人をいじめている意識がないから。

処刑人が自分でやる代わりに、蟲を使ってやることにした。処刑人のメンタルに配慮してのこと。

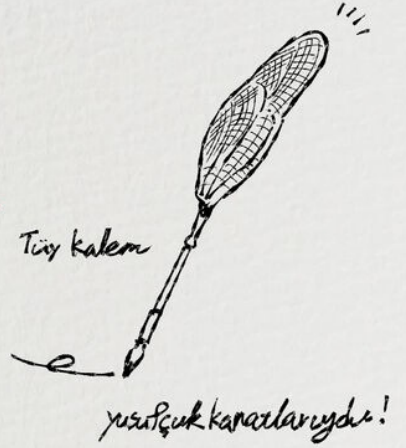
Böcek işkenceciler nedir?

Böcek işkencecileri, asıl işi böcek işkencesi olan bir kişidir.



蟲刑人って？
蟲刑人とは、蟲刑をメインにお仕事をしてる人のこと。

Görev tanımı.



- a) Suçlunun suçunun ne olduğunu öğrenin,
Hakim talimatından katıksız olarak cezası uygulayın.
- ii) Böceklerle iyi bakın. Büyümek ve çalışmak için,
Sağlıklarını kontrol etmek, onları beslemek ve kulübeletirini temizlemek.

büyük penis tartıl



仕事内容

- ① 罪人の犯罪内容を確認して、裁判官が決めた罰を実行する。
- ② 虫のお世話をする。育てたり増やしたりするために、健康をチェックしたり、エサを上げたり、小屋の掃除をする。

Netür insanlar



Büyük Şifacı amblemi

- i) Böceklerin yetiştirilmesi nedeniyle uzmanlık bilgisi gereklidir.
Her gün çalışabilen ve araştırmaya yapabilen insanlar.
- ii) Çünkü böcek yetiştiriyoruz ve deneyler yapıyoruz,
Doğa bilimlerinde güçlü olan kişiler.
- iii) 'Ulusal Kamu Hizmeti Alınır İlde Anavir'ni görmek gerekmektedir.
- iv) Fiziksel güçlerini kullandıkları için sağlıklarına dikkat edebilen kişiler.

どんな人がなれるか

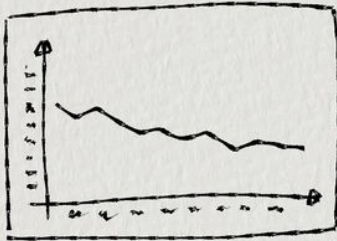
- ① 虫の飼育をするので専門知識が必要。毎日勉強や研究をできる人。
- ② 虫を育てて実験するので、自然科学に強い人。
- ③ 「国家公務員採用上級試験」に合格する必要がある。
- ④ 体力を使うから、健康管理ができる人。

Kaç tane var?

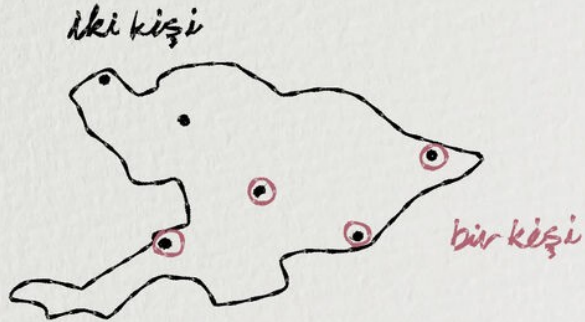
i) Talep çok yüksek değildir, hapishane başına bir veya iki kişi düşmektedir.

ii) Birçok insan böceklerle alması iyi değildir,

Pollywurtl olmak isteyen çok az insan var, bu yüzden çok az vakip var.



Her geçen yıl azalıyorlar



どれくらいいるのか

①需要はあまり多くなく、1つの刑務所に1人か2人。

②蟲は苦手な人が多いので、蟲刑人を目指す人は少なく、ライバルは少なめ。

意外と上級職である蟲刑人。

そんな「蟲刑人」を、

僕は社会科の授業でやる「職業体験」に選んだ。

学校を通して手紙を書いたんだけど、

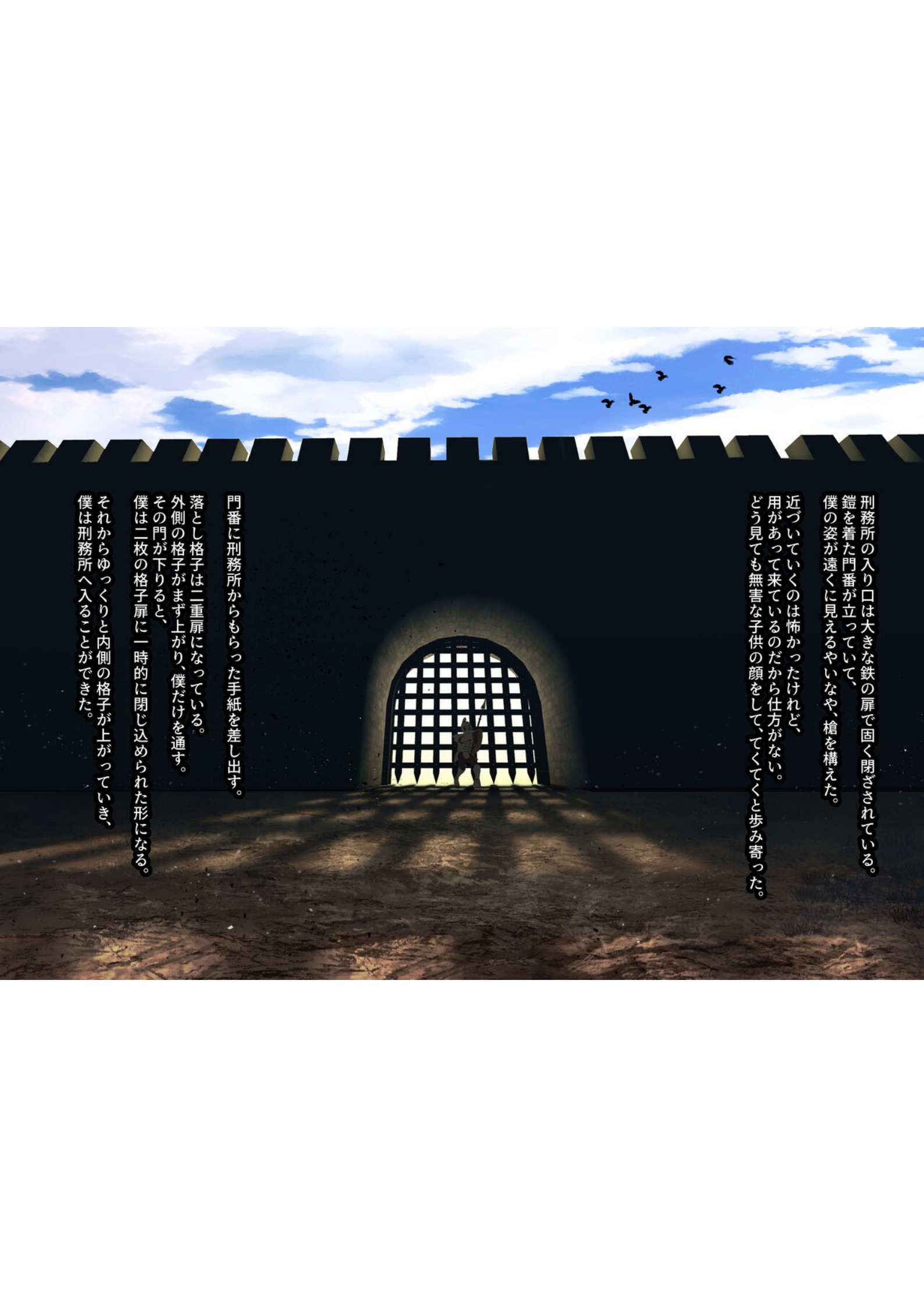
まさかOKされるとは思わなかったなあ。

今日1日、

貴重な体験をさせてもらうぞー!!

僕は筆記用具と水筒をリュックサックに入れて、
時間に余裕をもって家を出た。





刑務所の入り口は大きな鉄の扉で固く閉ざされている。
鎧を着た門番が立っていて、
僕の姿が遠くに見えるやいなや、槍を構えた。

近づいていくのは怖かったけれど、
用があって来ているのだから仕方がない。
どう見ても無害な子供の顔をして、てくてくと歩み寄った。

門番に刑務所からもらった手紙を差し出す。

落とし格子は二重扉になっている。

外側の格子がまず上がり、僕だけを通す。

その門が下りると、

僕は二枚の格子扉に一時的に閉じ込められた形になる。

それからゆっくりと内側の格子が上がっていき、
僕は刑務所へ入ることができた。

扉が開くと、そこには意外と広い空間が広がっていた。
窓に柵がついた奥の建物が舍房らしい。
すると、手前の建物から白衣の男が出てきて、こちらへ向って歩いてきた。

「君が…職業体験で来た子かい？」
声をかけられる。

「は、はい！ エレンです。」
僕は慌てて返事をした。

「ついてきたまえ。」
そういって、男は僕に背を向けた。



「あつ、クモ！」

男の背中に大きなクモがとまっている。

そこで僕はこの人が「蟲刑人」なのだと分かった。

クモは、小さなクモが壁に張り付いているのと同じように、自然と白衣にくっついている。リユックみたいに揺られている。

：落ちたりしないのかな？

なんとも不思議な気分で、クモを見ながら男の後ろをついていく。

こんなに大きな虫は、普通は野生にいないはずだ。
きつとこの人が巨大化させたのだろう。
クモが一番お気に入りなのかな？



蟲刑人の仕事部屋にはすぐ着いた。
建物1階、一番端の部屋。お客さんを招き入れるときは正面玄関を使うけど、普段は勝手口を使っているらしい。

「蟲刑人はこの刑務所で私一人だから、私一人が使っている。」
大きな部屋だ。学校で20人で使っている教室よりも大きい。
こんな大きな部屋を1人で使えるなんて羨ましい。

そうは言っても、たくさんの飼育ケースが置いてあるし、
カーテンがぴったりと閉められているから開放感はないけれど。

部屋を金色の蝶が自由に舞い、水槽では人面魚が泳いでいる。
この国の技術力ではなさそうな箱型の実験装置が点滅している。
机の上の書類は散らかっているけれど、棚の書類はすごく綺麗にしまわれている。



蟲刑人は扉の内側についている郵便受けを開けた。
職員がやり取りするのに使っているもので、外部からのものは届かないらしい。

つまり、僕が送った手紙は一旦どこかの部署の人に確認されてから、
この部屋の郵便受けに入れられたということだ。

蟲刑人は両手で抱える量の封筒とノートを取り出した。
僕はやるのがないから、ひたすら蟲刑人のやることを観察している。

「自分の机について、始業前に今日は何をするのか、お茶を飲みながら確認するんだ。
今日の蟲刑は1つか。」
そういつて、赤色の封筒をあげてみせた。

「この封筒に、罪人のプロフィール、犯した罪、蟲刑がまとめられているんだ。」

Böcek işkencecileri

10-11-1899



İstanbul Hapishanesi

「サラ・ウォルシュ、31歳、酒場店主、か…」
自分が知っている酒場か記憶をさかのぼっているのだろう、蟲刑人は顔を上げる。
ふと僕と目が合い、封筒の表面を向けて、最初の行のところを指さした。
「709Aというのが犯罪の種類を示している。不貞行為のことだ。
不貞行為ってのは、夫以外の男とのセックスだぞ。
1919は、この国で不倫をして1919人目に逮捕された人ということだ。」



犯罪者プロフィール
罪人番号 709A—1919 名前 サラ・ウォルシュ 年齢 31歳 職業 酒場店主

Suçlu profili.

Suçlu numarası: 709A-1919.

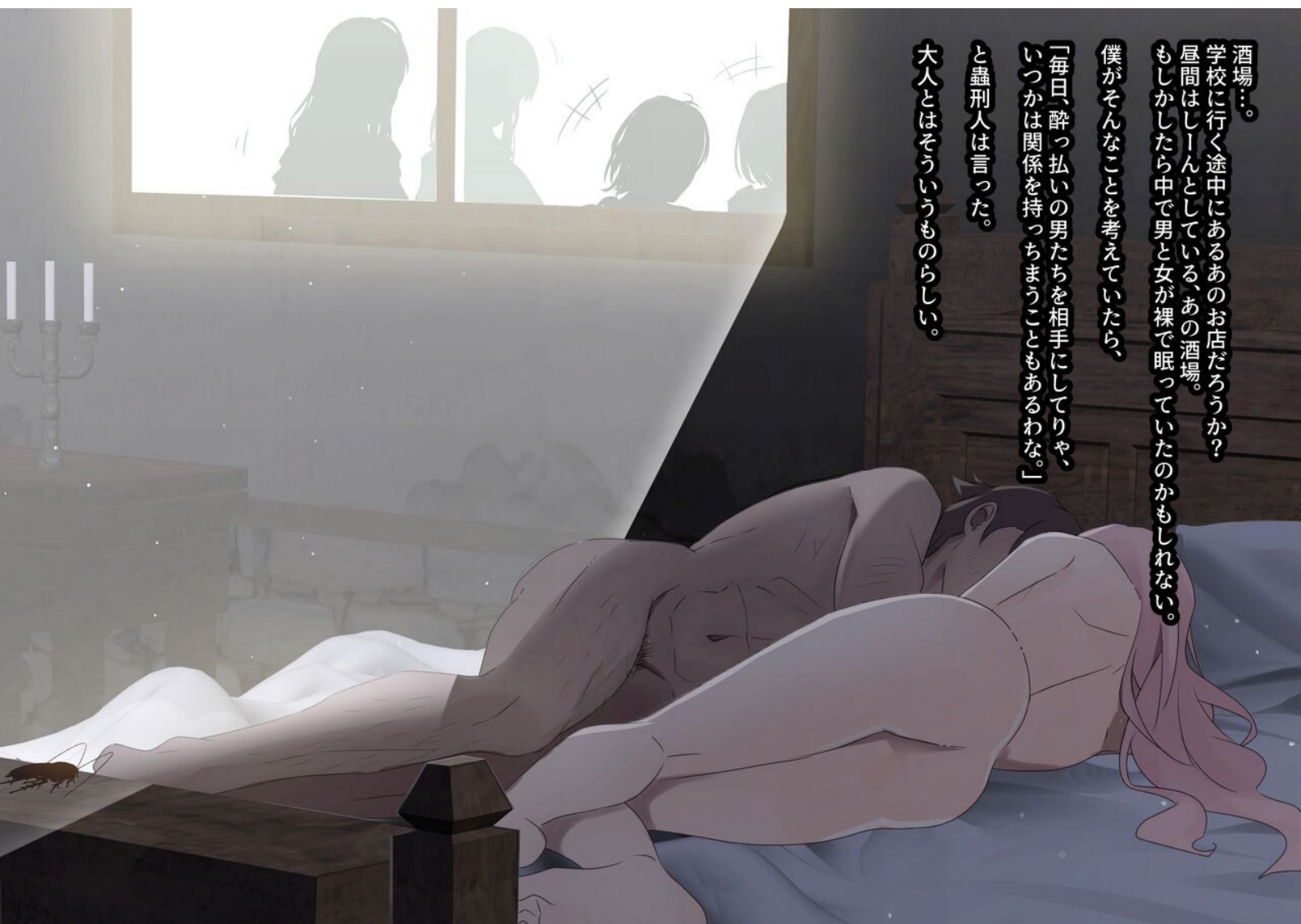
Adı: Sarah Walsh.

Yaşı: 31.

Mesleği: Barmen.

Günah.

Evli ama kocasından başka bir adamla s
Sadece belirli bir erkekle değil, çeşitli erk
Kocasının izinli olduğu günlerde işten so
Hemen ölçüsünü alırdım, sonra da ayakta
Bir kez daha seks yapmak adettendi.



酒場：。

学校に行く途中にあるあのお店だろうか？

昼間はしーんとしている、あの酒場。

もしかしたら中で男と女が裸で眠っていたのかもしれない。

僕がそんなことを考えていたら、

「毎日「酔っ払いの男たちを相手にしてりや、
いつかは関係を持つちまうこともあるわな。」

と蟲刑人は言った。

大人とはそういうものらしい。

罪

特定の男だけではなく、いろんな男と関係をもった。

夫の遠征日を見計らい、仕事終わりに客を自室に連れ込むのが習慣になっていた。



逮捕時に部屋にいた情夫は、罪人と性行為するのは6回目であった。

即尺の後、背面体位で性行為を始めるのが習慣だった。

ヘットに移動してから、の地位は目によって違ふが、罪人が求めるかまゝ連続射撃を行つた。辟妊はせず、内射精で、射精後のペニス、は罪人が必ず舐めとつていた。

情夫の休憩中、罪人はM字開脚をし、クリトリスを触っていることが多かった。

・事件発生と逮捕までの経緯

夫に発見され逮捕。逮捕時、罪人は全裸で、騎乗位で性行為をしていた。

罪人が「おまんこぎもぢッ!!」と叫んでいたと、夫と男が証言している。

はじめ、罪人は「酔って覚えていない」と主張したが、女は罪を認め、「体の疼きが抑えられなかった」と供述している。

「ほえ…えっちですねぇ…」
女の性欲のピークは30代ですからね、と言おうとしてやめた。
そんなウンチク、知ってるに決まっている。



● 蟲刑

複数の男と性行為したため、複数種類の虫と性行為させる。

「了解。オーダーは「複数種類」だな。何の虫を使うか考えよう。種類の違う蟲を使うときは、ケンカしないように相性に気を付けるんだ。乱交したわけじゃないから、5種類くらい用意して、1種類ずつ差し向けるか。蟲の大きさと数は比例してるんだ。おっと、比例っていつても分からないよな。大きいときは少なく、小さいときはたくさん用意するってことさ。」

僕は急いでメモを取る。

「ポイントは、罪人の罪を模した刑を与えること。場所は広場だな。夫さんにも反省してるところをちゃんと見てもらわないとな。広場が他の刑とかぶってないか、この後ミーティングで確認するけど、たぶん大丈夫だ。小さい蟲はそのまま自然に帰しちゃまいたいだろ？」

「そうですね。」と分かったような返事をしてしまったが、メモを取るのに必死で、「そうなんですか」が本心である。

「そして、こっちの記録帳。」
郵便受けに入っていたノートに、自分の本棚から引っ張り出したノートを重ねて
ボンと机に置いた。

「これ全部読む。」
そういつてフラスコでお湯を沸かし始めた。

「なんなんですか、それ。」
「取り調べのあれこれと罪人のあれこれ。全部載ってる。」
蟲刑人はコーヒー豆を挽き始めた。

中を見たかったが見せてくれる雰囲気がないので盗み見してみる。
平日・休日の主な過ごし方、行きつけの店、血液型、スリーサイズ、恋愛遍歴、
幼少期の過ごし方、図書館で借りた本の記録、
などが小さな文字でびっちらと書かれていた。

「これを読んで、サラ・ウォルシュという人間を理解する。」
そういつて、素早い動きでページをめくりはじめた。

それから突っ立っている僕の存在に気づき、
「エレインには何か仕事を与えておこうかな。」
そうだ、クワガタを隣の容器に移し替えておいてくれるか？」
と指示を出した。

僕は言われた通りにやった。
いよいよ職業体験らしくなってきたぞ。



蟲刑時間の30分前。

サラ・ウォルシュを舎房へ迎えに行く。罪人の移送も蟲刑人の仕事だ。

鉄格子がはめられた部屋の間を通って、
目的のサラ・ウォルシュのいる部屋へと向かう。

僕も蟲刑人の後ろをついていったのだが、変な視線を浴びてしまった。
ここに子供が来ることなんてないのだろう。
サラ・ウォルシュも目を丸くしていた。



サラ・ウォルシュをまず更衣室に連れていった。
舍房衣から、私服に着替えさせるためだ。

蟲刑人は男だけれど、サラ・ウォルシュの着替えを監視する。
それも仕事だからだ。

僕も職業体験なのだから、当然、見るしかない。授業の二環なのだから、仕方がない。

フリーサイズのぼろぼろの舍房衣がストンと床に落ちる。
刑務所指定の白い下着も脱いで、全裸になった。
なかなか健康的な太ももをしている。

蟲刑人の指示があるまで勝手な行動をしてはならない。

サラ・ウォルシュはおどおどと視線を泳がせ、足先をもじもじさせている。

かあ、

「腕伸ばして手開け」

蟲刑人のジェスチャーに合わせて、サラ・ウォルシュが腕を伸ばす。

蟲刑人はサラ・ウォルシュの周りを歩き始める。
靴音が冷たい床に響く。

蟲刑人は、サラ・ウォルシュの体の凹凸をナメクジが這うように眺めまわす。

サラ・ウォルシュの周りをゆっくりと一周すると、着替えの入った袋を渡した。



それから、私物の黒のセクシーな下着を着て、服を着て、ビスチェを締めていく。
「どうして私服に着替えるんですか？」

僕はひそひそ声で話しかけた。

「どこの誰が犯したのか分かりやすくするため、これが1番の目的だな。
服は職業や身分を表す。つまり、その人らしさなんだ。
服を傷つけることはその人を傷つけることにもなる。」

「そうなんですか？」

「例えば貴族。貴族は人一倍身なりに気を遣っている。
ドレスを破られることは、身が裂かれるのと同じくらいショックを受けるのさ。
まあ、この話はまた今度だな。」



それからサラ・ウォルシュは金色の髪留めやアクセサリーをつけていった。顔を下に向けたときの地まつ毛の長さといったら！町一番の美人かもしれない。

しかしまあ、こんな人が犯罪者だなんて…。意外な気もするけど、悪女は美人っていうイメージもあるし…。やっぱり悪い人なのかなあ。



そんなことを考えていると、
蟲刑人が今度はポーチを手渡した。

「その鏡を使え。」

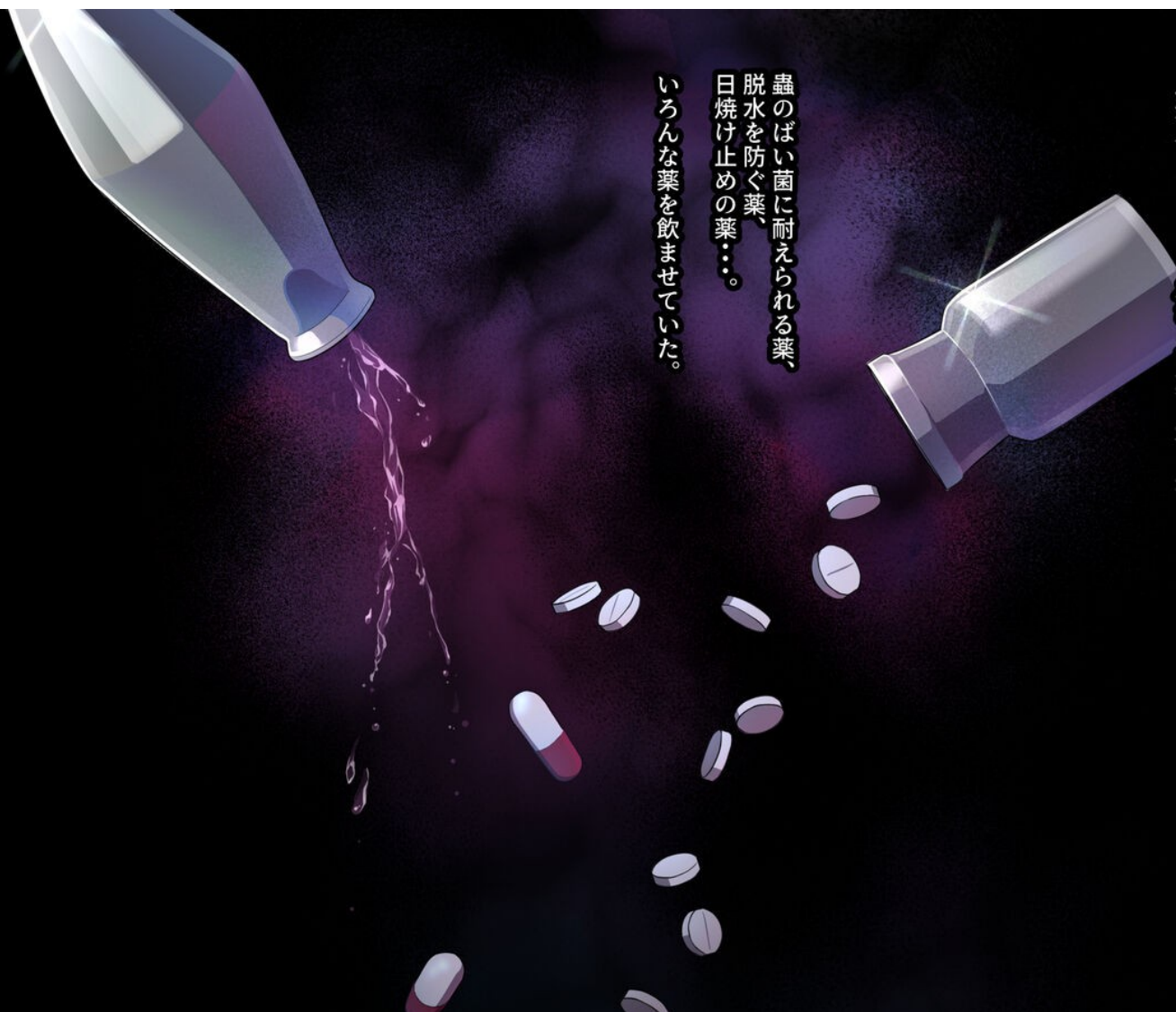
サラウォルシュは壁にかかった鏡の前に移動し、メイクを始めた。

アイシャドウとチークと口紅で色を付けただけなのに、
すごく華やかで、色気のある、夜の大人の女性になった。
僕が感動して見ていると、目が合ったサラ・ウォルシュは申し訳なさに微笑んだ。

「飲め。」
蟲刑人はサラ・ウォルシュに薬と水を差し出した。

蟲のばい菌に耐えられる薬、
脱水を防ぐ薬、
日焼け止めの薬……
いろんな薬を飲ませていた。

サラ・ウォルシュは出された薬を、ザラザラと飲んでいった。



更衣室を出ようとした時、それまで黙っていたサラ・ウォルシュが口を開いた。
「夫は来ていますか？」と聞いたんだ。

僕ははっとした。

サラ・ウォルシュは、逮捕されてからずっと夫のことを考えていたんだ。

蟲刑が恐ろしい、とかでつきりそんなことを考えているのだろうと思っていたのに。

「お前の夫は一番前で顔を固くして立ってるよ。」
蟲刑人は笑顔で言った。

サラ・ウォルシュはうつむく。
悲しげな表情に僕は胸が痛んだ。



手錠をつけたサラ・ウォルシュ、蟲刑人、僕。
3人で刑務所を出た。
街の中心部へ向って歩く。

この町は、大体の方角が分かっているれば、
どの道にいたって中央の広場にたどりつける。
石畳の中央広場は噴水があり、出店なんかもあったりして、にぎわっている。



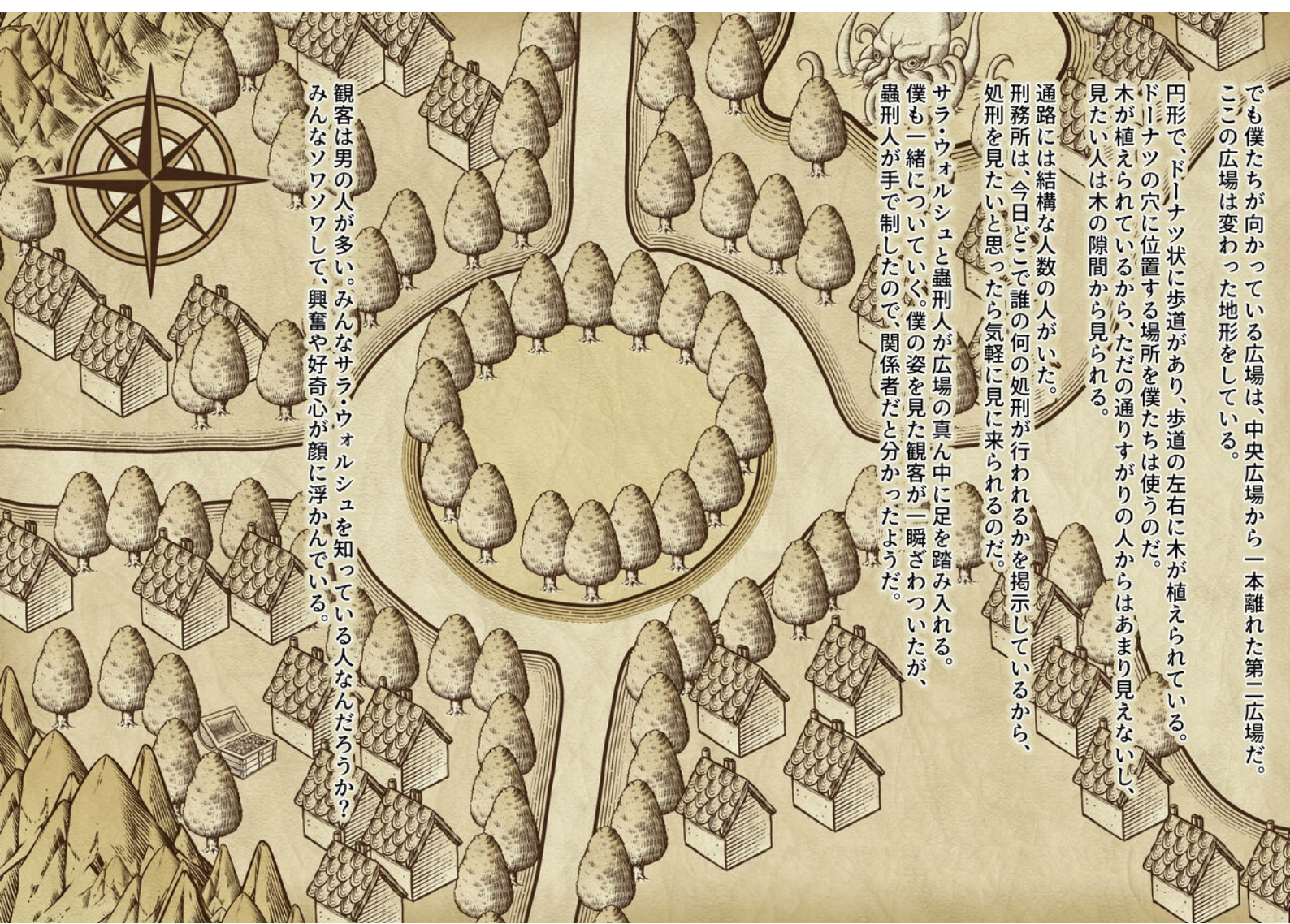
でも僕たちが向かっている広場は、中央広場から一本離れた第二広場だ。
この広場は変わった地形をしている。

円形で、ドーナツ状に歩道があり、歩道の左右に木が植えられている。
ドーナツの穴に位置する場所を僕たちは使うのだ。
木が植えられているから、ただの通りすがりの人からはあまり見えないし、
見たい人は木の隙間から見られる。

通路には結構な人数の人がいた。
刑務所は、今日どこで誰の何の処刑が行われるかを掲示しているから、
処刑を見たいと思ったら気軽に見に来られるのだ。

サラ・ウォルシュと蟲刑人が広場の真ん中に足を踏み入れる。
僕も一緒についていく。僕の姿を見た観客が一瞬ざわついたが、
蟲刑人が手で制したので、関係者だと分かったようだ。

観客は男の人が多い。みんなサラ・ウォルシュを知っている人なんだろうか？
みんなソワソワして、興奮や好奇心が顔に浮かんでいる。



蟲刑人は広場のと真ん中にサラ・ウォルシュを座らせた。

それから赤い封筒をカバンのサイドポケットから取り出して、中身を大きな声で読み上げた。

観客は興味津々で耳を傾ける。
二やつき、「そいつはいけねえなあ」なんて薄っぺらいことを言っている。

サラ・ウォルシュの顔はひきつり、瞳が揺れ動いている。
自分のしでかしたことに向き合っているのか、
はたまた、聴衆の反応に恥じらいをいだいているのだろうか。

罪人サラ・ウォルシュは
自慢の胸を

その日知り合
男のペニスにこ
ながら誘惑

腰をへこへこ
自ら振り股を

10回以上の
絶頂を経て
なお、その性慾は
おさまらず

0313

1303

挿入中にも
かかわらず、
右手でクリトリスを
左手で乳首をぐり
ぐりとつまみ

男をとっかえ
ひっかえ自室に



罪状の朗読が終わる。

蟲刑人はひとつ息をゆっくりと吸ってから、

「これより蟲刑を始める!!!」と大きな声で宣言した。

他の誰に言うでもなく、自分に気合を入れるような言い方だった。

サラ・ウォルシュはびくつと身を震わせ、不安そうな顔で蟲刑人を見上げた。

いよいよ蟲刑が始まるんだ。



「サラ・ウォルシュ。」
蟲刑人は低い声で命令した。
「足を開け。」

「え…」

「早く!!!!!!」
足を開く間も与えず、蟲刑人は人が変わったように叱咤した。



サラ・ウォルシュは正座を崩し、後ろに手をついた。
それから、弱々しく足を広げた。



蟲刑人は腰からナイフを抜いた。
サラ・ウォルシュのブラウスの肩紐に刃をかける。

グツ。

ナイフに向かって直線に肩紐が伸びる。

ブチッ。ナイフが光り肩紐がちぎれる。

ブチッ、ブチッ、ブチッ。

同様にひっかけては引いてちぎる、という動きで、コルセットやスカートも破壊していく。

サラ・ウォルシュはナイフを恐れて顔を歪める。
鋭い刃が当たって、服はズタズタに切り裂かれた。



綺麗なレースがほどこされたブラも切られる。
ぷっくりした乳首が丸見えになると、サラ・ウォルシュは耳が真っ赤になるほど赤面した。

最後はショーツ。腰の細い部分に刃が入り、切られ、剥ぎ取られ、
そこ辺りに投げ捨てられた。

破れた衣服の隙間から覗く陰毛は、更衣室で見た時よりも卑猥に感じる。

サラ・ウォルシュは観客の方をチラチラ見たり、目をそらしたり、
戸惑った動きを繰り返している。

サラ・ウォルシュは罪人で、蟲刑人の言うことに100%従わなければならない。
従わなくても、強制的に従わされる。 蟲刑人の大きな力に、僕はぞくつとした。



「もっと大きく開け」と、蟲刑人は命令する。

サラ・ウォルシュは震えながらも大胆に足を広げる。
その姿には明確な恐怖が漂っていた。

僕は背が低いから、蟲刑人よりもサラのアソコがよく見えている。
ぷっくりとした肉がちやりと開いて、陰毛でよく見えなかった割れ目の中が鮮やかに露わあらになった。
ビラはもちろんくぼりと空いた穴までよく見える。
その光景に僕は思わず息を飲んだ。





蟲刑人の持つ大きなカバンは蓋に鍵がかかっている。

カバンがもぞもぞと動く。

中の蟲たちが外に出たがっついてるみたいだ。

どの蟲から出すんだろう？

カバンを見つめていると、サラ・ウォルシュが「ひ……」と小さな悲鳴をあげた。

蟲刑人の背中に張り付いていたクモが、物音ひとつ立てずにサラ・ウォルシュの前に降りたのだ。

……

サラ・ウォルシュはクモをじっと見つめ、これから何が起こるのかと不安そうにしている。

クモはサラ・ウォルシュに近づいた。足が8本もあるから、トコトコと少し歩いただけで、あっという間に大接近する。

「きやあああつっ!」
サラ・ウォルシュの目は驚きに大きく見開かれ、体を反射的に後ろに反らせた。ウェーブがかった髪が、大きく揺れ動く。

そのオーバーな反応に、観客はくぎ付けになった。

「蟲の中で一番クモが嫌いなんだとよ。」
蟲刑人はサラ・ウォルシュから目を離さずに、僕にだけ聞こえるように低い声でつぶやいた。



クモは腹先から出した糸でサラ・ウオルシュの四肢を巻いていく。
太もも、ふくらはぎ、二の腕、前腕の自由が奪われる。
イモムシみたいにコロんとしたフォルムになった。

それから広場にぐるっと生えている木まで糸を伸ばして結ぶ。

糸の力で宙ぶらりんになった姿は、図工の授業で作ったぶんぶんゴマのようだった。

こうやっていつも拘束をしているのだろう。クモの動きには無駄がない。

蟲刑人は手を組んで、相棒の拘束を待っている。

サラは恐怖で半分泣き顔になっている。
「いや……こわい……こわい……よお……!! うっ……うう……ううう……」

確かに、糸を長い脚で体から引つ張り出す姿は気味が悪い。

糸は粘着質で切れる様子はないし、食い込んだ肉の盛り上がりからして
なかなかの強さで縛られているみたいだ。

サラ・ウオルシュの無力感が僕にも分かる。

でもまだ始まったばかりだ。

もう鳴咽を漏らして、大丈夫なのか。





クモは拘束を終え、糸の上を渡ってすると移動する。
向かう先はもちろんサラ・ウォルシュのところだ。
サラ・ウォルシュは恐怖に震え、その震えが蜘蛛の糸をミチミチと鳴らした。

クモはサラ・ウォルシュの体にびったりとくっついた。
まるで人間がハグしているみたいだ。
ぎゅうと強く抱きしめる。

サラ・ウォルシュは顔を歪める。

「ううううっ!! …っ…はあっ…はっ…!」
すごく苦しそうだ。

蜘蛛の力が強いのか、ただ気持ち悪いだけなのか判別がつかない。

ぐぎぎ…

ズッ
ズッ

「……とって…うう…クモ…とって!」
受刑者だということが分かつているのか、土台無理なうわごとを言う。

「こわい…こわいの…」
おでこには汗がにじみ出ている。恐怖が体中を駆け巡っているみたいだ。

ズッ
ズッ
ズッ

蟲刑人は人差し指でポリポリと頭をかいだ。
僕も同じ気持ちだ。

は

は

蟲刑人はサラ・ウォルシュに歩み寄り、両手で蜘蛛をひょいと持ち上げた。
クモはぬいぐるみのように大人しい。

サラ・ウォルシュはガチガチに拘束されているにもかかわらず、
開放感を感じているかのように大きく息を吐いた。
青かった顔色が血色を取り戻す。



「あっ」
木の向こうの野次馬も含め、みんなが同時に口を開けた。

サラ・ウォルシュがお漏らしをしたのだ。
きつと安心して気がゆるんだのだろう。

ああ...
やう...

カア
なんぞ...
とまんない...

じゅふ..

3Q
おあおああ

おしっこは勢い良く飛び散る。
サラ・ウォルシュは止めようとしているみたいだが、勢いは変わらない。
サラ・ウォルシュは何とかおしっこを止めようと、
おまんこのお肉をピクピクさせたり、お尻をクネクネさせたりする。
その姿があまりにも滑稽で、僕はすごく可笑しくなって笑ってしまった。
蟲刑人は表情を変えない。



次の瞬間、蟲刑人はサラ・ウォルシュの顔面にクモを乗せた。

「置きなおした」というべきか。

ひよいと取ったその動きを逆再生するように、位置を変えてひよいと置きなおした。

「ギヤアアアウウウアアアウウウアアアウウウアアア!!!」
頭のでっぺんから抜けていくような高い悲鳴が響き渡る。

サラ・ウォルシュは声帯と同じように全身を震わせた。
大きな胸が揺れ、胸と胸とがぶつかり合ってまた揺れる。
胸だけは糸で拘束されていないから、存在感がすごい。

クモの腹の細かい毛がサラ・ウォルシュの顔を逆撫でる。
さつき糸を張っている時に見えたクモの腹の模様を思い出す。
背中の模様より複雑な白の点々に黄色の帯があって、恐怖心をあおる模様をしている。

出糸突起というブツクリした肛門のような器官が
サラ・ウォルシュの口にグリグリとあてられる。

「むぐげーうー……!!! もんぐー……!!!」

顔は拘束されていないが、クモのしがみつきのによって身動きができない。
喉を締められたみたいに苦しそうなうめき声を上げる。



僕はサラ・ウォルシュの顔が見えやすい位置に移動した。
サラ・ウォルシュは唇をきつく閉じ、眉間にシワを寄せる。
上を向き、肩を上下に小刻みに揺らした。

「うぶっ、うぶっ……うぶっ……」

「あつ、吐きそう……」

僕がそうと言ったのと同時に、クモはイレギュラーを察知。
足をゆるめて、すばやく蟲刑人の背中に戻った。



蟲刑人がカバンから取り出したのは、古びたブリキのバケツだった。
サラ・ウオルシュはすぐさまバケツに顔を突き出した。
胃の中の不快感が、喉へとせり上がってくる。





吐く...!!
サラ・ウォルシュは今にも吐きそうな顔をしていたが、
次の瞬間、何かに驚いて後ろへのけぞった。
「んむう...!!」

んむう!!



「何を勘違いしている？」
蟲刑人は手首の力でさつとバケツを揺らした。
バケツの中身、大量のナメクジがサラ・ウォルシュの顔面へと飛んだ。



「おつ、オエエエエエ…」

ブルッ
ブルッ
ブルッ

ビュッ

胃の中のものが、ナメクジと一緒の勢いよく流れていく。
人がゲロを吐くところを、こんなにしっかりと観察したのは初めてだ。
「汚エなあ」
木陰から覗いているおじさんの顔も気持ち悪そうに歪んでいる。
「ここには、心配してくれる人は一人もいない。」



ナメクジは、自分が蟲刑に使われているなんて知る由もなく、ただのんびりと体をうねらせている。

今日は快晴。

ナメクジの粘液がキラキラと光っている。

サラ・ウォルシュのピチピチとは言わないが、ムチムチとした肌に光り輝く粘液をなすり付けて這いまわる。

ナメクジは、一般的なナメクジよりやや大きめだ。

蟲刑人は真剣なまなざしでナメクジの動きを見守っている。次の二手を考えているようだ。



ナメクジは、ぬめりぬめりと体全体をくねらせながらゆっくりと進む。
サラ・ウォルシュの顔はぐちよぐちよで、それが涙なのか、粘液の光なのか、アイシャドウのきらめきなのか、判別がつかない。
仲間の粘液もうまく利用して、ナメクジは下へ下へとおりていく。
皮膚にぴたりと吸いついて、決して落ちたりはしない。

嘔吐によって腹に集められたナメクジは、
破けたスカートの間に露出した下腹部をなぞるように進み、陰毛をなんのそのという調子で前進する。



陰毛を超え、鼠径部にそってアナルへと到達したナメクジは、おまんこの方へと向きを変えた。

おまんこはナメクジに負けず劣らず湿っており、サラ・ウォルシュのじめじめと、ナメクジのねとねとが絡み合う。

ぬるっとした感触がクリトリスをつつみこむ。

サラ・ウォルシュはナメクジがもたらす快感に驚いた。
「え……ふえっ……!？」

そういえば、蟲刑人が言っていた。
蟲をカバンに入れて持ち歩くのは、「温めるため」だと。

ちゅくっ♡

「あう…んっ、んっ…」
温かくて心地よい刺激に小さな声をあげる。

サラ・ウォルシュはたくさんの男にこんな反応を返してきたのだろう。
いじめたくなるような甘い声だ。

蟲刑人の部屋で、「サラ・ウォルシュはどういう人間だと思うか？」と蟲刑人に聞かれたことを思い出す。

あの時は「性欲にとりつかれた女。性欲を隠して男にすりよる裏のある人間。」と解答した。

でもこうやってサラ・ウォルシュに会って、彼女を観察して、それは間違いだと分かった。

サラ・ウォルシュは素直な人間だ。心と体が完全に一致していて、ズレを感じさせない。
体が気持ちよくなれば頭が真っ白になるし、Hなスイッチが先に入れば股が自然と開いてしまう女だ、と、今ならそう答える。





ひゃ

「んあ…」
ナメクジが乳首にたかり始める。
ぬるぬる、ぬるぬる。
ナメクジの腹が乳輪をなぞる。
ナメクジの腹のシワが伸びたり縮んだり、
人にはできない繊細で新鮮な感覚をもたらす。

サラ・ウォルシュは胸を反らす。
胸の先のもどかしい快感の広がりをめいっばい感じている様子だ。
前にハリよく飛び出したおっぱいにツンとした乳首が、ここから見ていても目立つ。
ナメクジのウネウネ感と、粘液のヌメヌメ感が絡み合う。
気持ち悪さとゾクゾクするような快感が、交互に、いや同時に押し寄せてくる。





ときどき、ナメクジは触覚を伸ばし、乳頭を小さくつつんする。
「おっ、おっ…、あふう♡」
感触が快感に傾いた時、サラ・ウォルシュは声を漏らす。



ナメクジはあっちへ行ったりこっちへ行ったり。水流に身を任せる世舟のように、気まぐれに向きを変える。乳輪をくるくるなぞっていたナメクジは、乳房に移動してしまった。

サラ・ウォルシュは唾を飲み込む。中途半端に取り残された快感がむずむずして堪らないのだろう。呼吸が荒く、顔が紅潮している。



ナメクジの頭が乳首の方へ向く。
「ああ…来ちゃう…」

「だめ、だめよ…はあっ…はあっ…!!」
サラ・ウォルシュの目が大きくなる。

はあっ…

はあ

はあ

はあ



ナメクジは乳首の真ん中をつつぎった。
「はぁあん………♡!!」

サラ・ウォルシュが乳首に気をとられている間に、
1匹のナメクジがおまんこの穴をつつき始めた。
「ああっ…!!」

サラは股をさらに広げ、腰をくねらせた。
「やめてえっ! そこはいやあっ!」



それでも気持ちいいのだろう。
早いまばたきを繰り返し、息を荒げる。

「いつちやうからっ：!!」

「イキたくない! わたしナメクジでイキたくないいいつつ!!」

ナメクジのねっとりした動きを、サラ・ウォルシュは警戒している。
たった1匹のナメクジがとんでもない快感を与える、ということをもう学習しているのだ。



蟲刑人はサラ・ウォルシュの方を向きなおして話を続ける。

「ただ、気持ち良くてやってただけの猿なんだって、深く痛感してもらわないといけない。お前はビッチで、相手が夫でなくても、誰でも、ナメクジでもイツちまうクソザコマンコなんだよ！」



イクッ!!!

イクッ♡

イクッ♡♡

イクッ♡

イクッ♡

イクッ♡

イクッ♡

イクッ♡

イクッ♡

イクッ♡

イクッ♡

イクッ♡

イクッ♡

イクッ♡

イクッ♡

イクッ♡

イクッ♡

イクッ♡

イクッ♡

イクッ♡

イクッ♡

イクッ♡

イクッ♡

イクッ♡

イクイクイクイク...

イクッ♡

イクッ♡

イクッ♡

ああああ♡♡♡

ak işleniyorum,” diyor.
herkesin önünde sevdiğini,
lafına karşılık yapmayan
ni işliyorum.
niyorum. İnsanlar o kadar kolay değişmez.
aten suç işlemezler.



bu iyi hissettikleri için sevdiğin maymunlardır,
bir kaktakın, sen bir kaktakım. Sen bir

蟲刑人は正義感が強くて、すごくかっこよかった。
(もしかしたら「ナメクジでイキたくない」というナメクジ軽視発言が
気に障っただけかもしれないけど。)

あの分厚いノートを読み込んで、サラ・ウォルシュという人間の本质を見抜いて、
どうするのが最高の刑罰になるのか、どうすれば心から反省して罪を償えるのか、
最適解をはじき出してるんだ。

この人、本当にすごい。プロフェッショナルだ。
経験や勉強もしっかりやってきた証だな。

職業体験に蟲刑人を選んで本当に良かった。
蟲刑人の言った言葉を一言一句漏らさずメモに書きとめた。



「ナメクジがそんなに嫌か」
蟲刑人はしゃがみ込み、ナメクジが入ったばかりのおまんこを覗き込む。



そして、手を裏返して人差し指と中指を膣に入れた。
蟲刑人が手マン!!
蟲刑は蟲を使うのがモットーではなかったのか?



蟲刑人は指で膣穴を広げたのち、
使い込まれた感じの漏斗を差し込んだ。

なうんだ、漏斗か。
あの蟲を使う番だな。

僕は準備を少し手伝ったので、
次の蟲が何か予想ができた。

ガ
ガ
ガ

んっ

蟲刑人は片手でカバンを漁り、
ワームを取り出した。
畑でよく見るあのワームだ。

でろん

「キヤアアアアアアアアアアッッ!!」

サラ・ウォルシュの甲高い悲鳴が響き渡る。



蟲刑人はポテトサラダを手で盛るときにみたいに、カバンの中のワームを優しくつまんで漏斗へと乗せていく。ワームは十匹くらいずつ膣内へ入っていく。

漏斗によって大きく開かれた肉穴に抵抗するすべはない。

んんん

どやどや

中に入ったワームはどんな動きをしているんだろう。ぼろっと地面に落ちた1匹のワームはクネクネと元気に体を動かしている。

1匹のワームでもあんなに大人しくしないのだから、あんなのが大量にいたら二体どうなるんだろう。想像するだけでおぞましい。



「今、ワームはお前の肉ヒダを登って降りて…登って降りて…どんどん奥に進んでいるぞ。」
蟲刑人は怪談を語るように抑揚をつけて言った。

「ひ、ひいひい!!!」

サラ・ウォルシュは声を上げて震えあがった。

体内がどうなっているかが分からないのは、僕だけでなく、サラ・ウォルシュ本人もだ。それを分かってか、蟲刑人は豊富な知識を持って、ワームの様子を鮮明に伝えていく。
「さっき指つつこんでみたけど、お前の膣壁はヒダがいいなあ。ピラピラしてで、最初からワームが入ってるみたいだったぞ? こういうところがワームは好きなんだよ。」



蟲刑人の解説をもとに、内部の様子を想像してみる。

「ワームは1匹1匹性格があつてな、
膣の細かいヒダヒダにぶちあたったとき、
もうここでもいいやゝって丸くなるやつもいれば、
動き回って乗り越えるやつもいる。」

「こいつらがくねくね動き回る理由が分かるか？
…安全なところを探すため？
…いいや違う。」

「今は繁殖期なんだ。
やる場所を探して、ウロチョロしてんだよ。」

「うう…気持ち悪い…」



「ワームは雌雄同体で、ちんこもまんこも両方もってるんだ。2匹のワームがお前のグチョグチョの肉ヒダに入り込んで、絡み合ってるよ。」

ワームの交尾ってのは面白くてな、普段は細い体してんのに、交尾の時はちんこがにゅーつと伸びて、ちんこ周りがぷっくり膨らんで、精力みなぎってんのな。

そんで、ドクッ…ドクッ…!! って。人間と一緒に、精子を流し込むのさ。

たくさん入れたから、乱交みたいになってるかもしれないなあ…。」

「気持ち悪い、気持ち悪い!」



「はあ…。残念だねえ。
ワームの洗練された生態の素晴らしさが分からないなんて。
これは退化じゃなくて進化だよ？」

蟲刑人はワームを追加投入する。

「ああああつ！ のぼってくる…！！
うううううう！ いや…来ないで…！！」

逃れるすべがない状況に、涙が溢れ、声が震える。
どうしようもない感情が声に乗って溢れ出てくる。





蟲刑人はクモに命令をする。
クモは糸でコブを作り、サラウオルシュの下半身を締めあげた。
これでワームはもう出てこれられない。

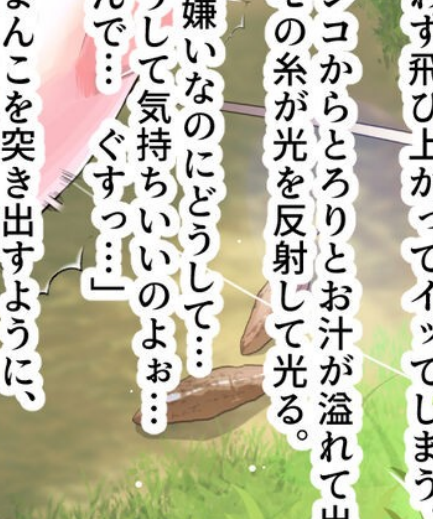
「蠕動運動って分かるか。」

波とか、食べ物を飲み込む動き。」
と言って、蟲刑人は手でグーとパーを繰り返して見せた。

「ワームは体の一部を伸び縮みさせて動いてんだよ。
美しくてしなやかな動きだ。」

これでヒダを乗り越える。

「たくさんワームが束になって、ビチビチビチって、
1番良い繁殖場はどこだろ!? って競争してるだろうな。」



Gスポットをワームが圧迫し、
思わず飛び上がってイッてしまう。

マンコからとろりとお汁が溢れて出し、
クモの糸が光を反射して光る。

「蟲嫌いなのにどうして…
どうして気持ちいいのよお…
なんで…ぐすっ…」

おまんこを突き出すように、
腰が小刻みに震えている。

「蟲嫌いなのにどうして……
どうして気持ちいいのよお……
なんで……ぐすっ……」

おまんこを突き出すように、
腰が小刻みに震えている。

蟲刑人は僕を振り返り、メモするようノートを指さして言った。

「俺が育てたワームは活きがいいんだ。

1回で産まれた集団の中の上位5%を残して

あとは他の虫のエサにする。

上位5%を蟲刑用に育てているんだ。

ワームも年をとるからよ、

常に若くて元気なやつを使えるように用意しておかなければならない。」



蟲刑人はサラ・ウォルシュの股をふさいでいたクモの糸を切る。

カバンからホースを取り出し、バケツとおまんこを繋ぐと、
大量に大量のワームを送り込み始めた。
漏斗の比ではない量のワームがサラ・ウォルシュの中へ侵入する。

ひゅん

「イツ…!？」

「鮭が川をのぼるように、
鯉が滝をのぼるように、
競うように奥へ向かってるさ。」

何百匹ものワームをが
他の個体を蹴散らすように、
ぐねぐねと体をU字、逆U字とくねらせて上っていったるぞ。」





蟲刑人は両手の指をわしゃわしゃと絡めながら、
ふわふわと空気をこねるような動きをして、ワームの動きを説明する。

「膣に小刻みに圧をかけてるんだ。気持ちいいだろ？」
人間の男はこんな動きできないよな？」

「うっ…」

サラ・ウォルシュは言葉を詰まらせる。悔しくも同意のようだ。

「本当に良い仕事するよ、ワームは。」
蟲刑人の声は喘ぎ声にかき消された。

ああ
♡♡♡

♡
ああ
ああ♡♡

「こんなのはじめてだろ？ もう人間には戻れないかもな」
「あっ……！ ああ……っ♡♡!!」

ワームは膣を上って子宮へと到達する。
その数は、百、二百…。バケツ何杯分と数えるくらいの量だ。
伸びるようにできている女の腹は蟲でパンパンに膨れ上がった。



「あああつ！あつ、あつ、あああ！」
膣が締まって、ワームがおまんこからこぼれ出る。
全身がガクガク痙攣している？サラ・ウォルシュの声が止まらない。

「ちよっ…んふううつ!! おあつ! ああつ…!!」
「なっ…あつ! はああつ! …あつ!」
「もっ…くっ…!! あああんっ! はあつ!」
何か言おうとしても、快感の塊に突き上げられて言葉にならない。

サラ・ウォルシュの喘ぎ声。
酒でハスキーになった普段の声とは
対照的な高い声だ。

まるで笛のようで、
人々の耳をはっと惹きつける。
通りがかりの人が集まって、
観客が急に増えた。

「お前の夫は可哀そうだな。」
自分しか聞けないはずの声を知ってる人がこんなにもたくさんいるんだから。
蟲刑人は大声で言ってみせた。

「ああん♡!」

「んあん♡!」

「あぁ♡!」

「ああああ♡!」

「おふっ…♡!」

短く連続する声が、たくさんのワームの動きを表している。

おまんこのあちらこちらで、
ワームの生命力あふれる
くねりの刺激を受けているのだろう。
あっちでイッている中、こっちでもイク。
電気椅子に座っているみたいに体がビクビクと跳ねている。
イッている証拠に、締まって狭くなったおまんこからワームがあふれ出た。
おならのような音を鳴らして、豪快にワームを漏らしている。

ズルッ

グニャ

「らめ…♡あんっ…♡ ああ…うああっ！♡♡」
「おかひく…なっちゃ…！んっ！！♡♡♡」
「も…っ！♡ ああっ♡ああ♡あああっ…！！♡♡♡
ああ〜♡！！ い♡い♡い♡い♡！！♡」
アクメが止まらないようだ。
脳のどこかのコントロールを失っているとは思えないような大声が
だだっ広い広場の空に広がった。

おまんこから
腹いっぱいワームが出てきた。
出産というよりも、排泄のような感じた。

蟲刑人が鼻の上にワームを置いててもサラ・ウォルシュは気づくことなく、
息をつくこともなくイキ続けている。
周囲の静けさの中、サラ・ウォルシュだけが声を上げ続ける。
死に際のセミみたいに、バタバタと狂ったように体を震わせている。

ガッガッガッ

ポトポト

ベチャッ

どれほどイキ続けていたのだろう。
 僕はサラ・ウォルシュのあられもない姿をずっと見ていられるような気分になつていたからよく分からないけれど、
 とうとうサラの口から助けを求める言葉が出始めた。

もうげんかあい！
 らすけてえんっ！
 ああん！ ああっ！
 おおおお！ い…めんな…せこっ！

わだしっ…
 もうイぎたくなっ……あん！
 ……もおおおっ……せつよおお……
 あんあせっ！

どれほどイキ続けていたのだろう。
 僕はサラ・ウォルシュのあられもない姿をずっと見ていられるような気分になつていたからよく分からないけれど、
 とうとうサラの口から助けを求める言葉が出始めた。

もうげんかあい！
 らすけてえんっ！

ああん！ ああっ！

おおおお！ いーめんな…せこっ！

わだしっ…
 もうイぎたくなっ……あん！

……もおおおっ……せこめめめ…
 あんめめめ！

どれほどイキ続けていたのだろう。
 僕はサラ・ウォルシュのあられもない姿をずっと見ていられるような気分になつていたからよく分からないけれど、
 とうとうサラの口から助けを求める言葉が出始めた。

もうげんかあい！
 らすけてえんっ！
 ああん！ ああっ！
 おおおお！ いーめんな…せこっ！

わだしっ…
 もうイきだくなっ……あん！
 ……もおおおっ……せこっ…
 あんせこっ！

どれほどイキ続けていたのだろう。
 僕はサラ・ウォルシュのあられもない姿をずっと見ていられるような気分になつていたからよく分からないけれど、
 とうとうサラの口から助けを求める言葉が出始めた。

もうげんかあい！
 らすけてえんっ！
 ああん！ ああっ！
 おおおお！ いーめんなーっ！

わだしっ…
 もうイきたくなっ…おん！
 …もももも…おん！
 あん！あん！

どれほどイキ続けていたのだろう。
 僕はサラ・ウォルシュのあられもない姿をずっと見ていられるような気分になつていたからよく分からないけれど、
 とうとうサラの口から助けを求める言葉が出始めた。

もうげんかあい！
 らすけてえんっ！
 ああん！ ああっ！
 おおおお！ いーめんなーっ！

わだしっ…
 もうイきたくなっ…おん！
 …もももも…おん！
 あん！あん！

どれほどイキ続けていたのだろう。
 僕はサラ・ウォルシュのあられもない姿をずっと見ていられるような気分になつていたからよく分からないけれど、
 とうとうサラの口から助けを求める言葉が出始めた。

もうげんかあい！
 らすけてえんっ！

ああん！ ああっ！

おおおお！ いーめんなーっ！

わだしっ…
 もうイぎたくなっ…おん！

…もももも…おん！

あんずっ！

どれほどイキ続けていたのだろう。
 僕はサラ・ウォルシュのあられもない姿をずっと見ていられるような気分になつていたからよく分からないけれど、
 とうとうサラの口から助けを求める言葉が出始めた。

もうげんかあい！
 らすけてえんっ！

ああん！ ああっ！

おおおお！ いーめんなーっ！

わだしっ…
 もうイぎたくなっ…おん！

…もももも…おん！

あんずっ！

どれほどイキ続けていたのだろう。
 僕はサラ・ウォルシュのあられもない姿をずっと見ていられるような気分になつていたからよく分からないけれど、
 とうとうサラの口から助けを求める言葉が出始めた。

もうげんかあい！
 らすけてえんっ！
 ああん！ ああっ！
 おおおお！ いーめんな…せこっ！

わだしっ…
 もうイきたくなっ……あん！
 ……もおおおっ……せこっ…
 あんせこっ！



「はぁ~~~~」
蟲刑人が大きなため息をついた。

「そうやって言ったら、男共はやめてくれたのか？」
ねちっこく、けだるそうにサラウォルシュに問いかけた。

サラ・ウォルシュはこくこくとうなづく。

「やめてくれたんだとしたら、
思いやりのあるセックスしてたってことだよなあ。」
お前はなあ、

夫以外の男とも愛し合ってたんだよ!!!

蟲刑人は女に浮気された思い出でもあるのだろうか。
すごい勢いで罵った。

「スケべまんこかき回されて、
ぐちゃぐちゃにされるのが大好きなんだろ!!!

もう一生やりたくないって思うくらい、
今日ここで一生分やってやるよ!!!」

カバンを開き、三角フラスコを取り出す。
コルクで蓋をされている。
中には黒っぽいものがぎっしり入っている。

「ワームでばんばんになったところでも、隙間ってのがあんだよ。
どんなに小さな隙間でも通り抜ける虫がいてな。お前もよく知ってる虫だよ。」

ニタァと笑う蟲刑人が取り出したのはゴキブリだった。



「いやあああああ!!!」

サラはクモの時よりも嫌悪感をあらわにした。

ゴキブリは酒場によく姿を現す。

賑やかな客席にはゴキブリはなかなか現れないが、キッチンの方には調理台にも食品置き場にもいて、サラ・ウォルシュが何度ビクついたことか。

ゴキブリは何度見ても驚いてしまう。

一番恐いのはクモだけど、一番嫌いなのはゴキブリなのだ。

暴れるサラ・ウォルシュをクモが糸を巻きなおす。

その過程でアームカバーが脱げたので、ついでに全裸にしておいた。



蟲刑人は瓶の蓋をあけ、おまんこに押し当てる。
ビラを広げ、ピンクのお肉に瓶の口が密着する。

ゴキブリは1匹も外に逃げることなく、体内へと入っていく。

「ほうら、ゴキブリはワームの間をくぐりぬけてくぞ」
蟲刑人は楽しそうだ。

「いやあああああ！
やめてえええ！」

サラ・ウォルシュは必死に抵抗する。
しかしどんなに暴れたって、糸がきしむだけだった。



瓶の中のゴキブリが減っていく。

「きもちわるい…」

「きもちわるい!!」

「きもちわるい!!」

ゴキブリの足がカサカサと動く。
お互いの体を押し合い、つるつるな瓶にへばりつき、
触覚をびくびくと動かすのが見える。

足、触覚、固い外骨格。

ナメクジとワームなんてマシな方だったのだとサラ・ウォルシュは感じた。





くらくらししてボーッとした頭に突然パチパチと快感が突き上げた。
「カッ!!!?!」
子宮にゴキブリが侵入し、内部を駆け回りはじめたのだ。

「い…や…!! はぁぁんっっ♡!!!
イキたくないっ!! もう…いやあっっ♡♡♡」

蟲刑人は空になった瓶を回収し、2本目を押し当てる。

びくんっ♡



「んほおおおおお!!!」

「あああああ……♡♡♡♡♡」

「……!!!♡♡♡♡♡」

んほ
ああ♡
ああ♡

イキ済みの体にゴキブリの猛攻をくらって、
サラ・ウォルシュは強制的にイカされてしまう。
眼球は上を向き、口からは声帯が震えている音だけが出る。
爆発的な快楽に飲み込まれ、意識がぶっ飛びそうになっている。





「どんどんゴキブリが入っていつてるぞ。よく伸びる子宮だなア!!
膣もガバガバなら子宮もガバガバだな!!」

サラ・ウォルシュは顔を赤らめながら大きな喘ぎ声をあげ、
全身を左右にひねりいつている。涙が飛び散り、胸が大きく揺れる。
イキすぎて喘ぎ声が途切れたり、呼吸ができなくなったりしている。
激しさを増した反応、その壮絶なイキっぷりに、僕のアソコもじんと熱くなった。

快感のピークに達したのだろうか。
サラ・ウォルシュは腰をガクガクさせる。

ピュッとアソコから透明な液体が飛び出すと、
ジョボッ、ジョボッ、と量を増して漏れ出し、
もう止まらないといった様子で、勢いよく噴き出した。
ゴキブリも何匹か流されて飛び出した。

おしっこをしたのかな？と僕は思ったんだけど、
周りの人たちが「潮ふいた」って言ってたから、
どうやらおしっこではないみたい。

確かに、よく見たら、おまんこの穴から出ているように見える。
気持ちよさそうな顔してるから、Hな体の反応なんだろうな。
蟲刑場を屋外にしておいて正解だったな、と思った。

あー♡





「…まだイキたりねえって顔してるな。」
蟲刑人が話しかける。

「くっ！」
サラ・ウォルシュは首を横に振る。

…っ

くっ
くっ
…

「…細かいので責めないで、大きいの入れて、突いて、突いて、っと思ってるな？」
サラ・ウォルシュはまたもや首を振った。
「違う！ そんなの思ってますんっ!!」

必死に否定しているが、
サラ・ウォルシュの頬は真っ赤だ

否定したところで、イキまくっている事実が恥ずかしいのか。
もしくは、本当に大きいものを入れてほしいと言いついて当てられて焦っているのか。
ぼくにはよく分からない。



蟲刑人にとってはサラ・ウォルシュの返事などどうでもいいようだ。

「周りたくさん人がいるから、聞いてみるか。」

この中に、ペニスを貸していただける人はいませんか？
中に射精してくれた方には、謝礼をお出しします。」

木の後ろの男たちがざわめく。
まさか巻き込まれるとは夢にも思わず、ただ野次馬気分で見にただけだったのだ。
隣の者と顔を見合わせ、困ったようにこめかみを掻いている。



「いや、イヤだろ…ゴキブリ入ってんじゃん…」

「デロ女の汚マンコ…俺、無理…」

「引くわ」

サラ・ウォルシュは顔を真っ赤にした。
たくさん男の名乗り出ると思い込んでいたのだ。

逮捕される前は、酒場の客からいやらしい目で見られていた。
さりげなく肩に腰に手をまわす者や、おっぱいをガン見する者もいた。

自分の価値はここまで落ちてしまったのかと、サラウォルシュは感じざるを得なかった。

「確かに、蟲が入っているのは、挿入できませんね。 蟲は出します。」
蟲刑人が中に入っていた虫をすべて取り除いた。

ゴキブリは仲間のゴキブリの行動をよく見ているもので、
1匹、2匹と外に出すと、後に続いて次々とでてきた。

サラウォルシュは蟲から目をそむけている。

ワームとナメクジは簡単にはでてこなかったため、
蟲刑人は人差し指でグリグリとほじくりだす。

「んっ… これ以上かき回さな…あああッ♡!!!」

おまんこを粗雑に扱われて、サラウォルシュは簡単にイッてしまう。
蟲刑でイクならともかく、蟲刑人の作業している指でイッてしまうなんて、
これは恥ずかしいだろうと思った。



「もう体内に蟲はいません。
サラ・ウォルシュを犯してくれる方はいませんか？」
ふたたび蟲刑人がギャラリーを巻き込む。

しかし、手を上げるものは1人もいなかった。



蟲刑人はやっぱりな、という顔をしてサラ・ウォルシュの方を向いた。

「人間ってのは身勝手なものさ。
きれい・汚い、エロい・エロくない。
さっきまでやりたかったものも、
ちよっと状況が変われば全くやれなくなる。」

サラ・ウォルシュの目から涙がこぼれた。

「その価値観は蟲にはない。蟲は差別しない。
どんなマンコだって、蟲なら受け入れてくれる。」

そういつて

蟲刑人は呼笛をカバンから取り出し、音を鳴らした。

「足早いから、すぐ来る。」



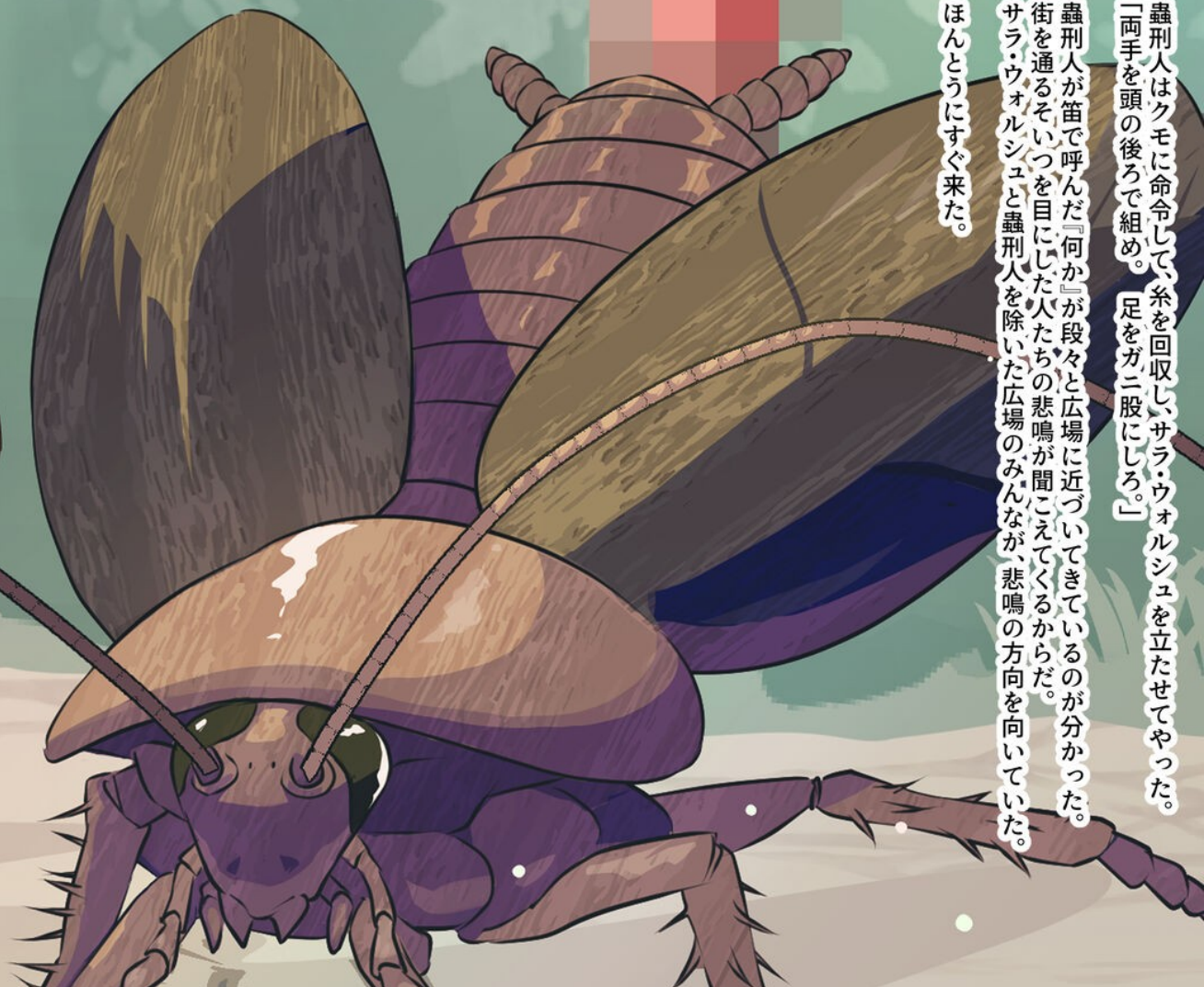
蟲刑人はクモに命令して、糸を回収し、サラ・ウォルシュを立たせてやった。
「両手を頭の後ろで組め。足をガニ股にしろ。」

蟲刑人が笛で呼んだ『何か』が段々と広場に近づいてきているのが分かった。
街を通るそいつを目にした人たちの悲鳴が聞こえてくるからだ。
サラ・ウォルシュと蟲刑人を除いた広場のみんなが、悲鳴の方向を向いていた。
ほんとうにすぐ来た。

僕よりも大きい、巨大ゴキブリだ。

そいつはお尻を後ろに反らせ、背伸びをするように、ぐいっとペニスを勃起させた。

そのあまりの大きさに、観衆たちがどよめく。
サラ・ウォルシュは背後で何が起こっているのか分からず、不安げな表情を浮かべる。
振りむきたくても蟲刑人の許可がなければ勝手なまねはできない。



ゴキブリはペニスを上げたまま、サラ・ウォルシュの下を高速移動でくぐる。

ゴキブリの触覚が太ももを鞭打ち、パンパンになった亀頭がサラ・ウォルシュの股をたたく。

自分の股の下を潜り抜けた、茶色くて平べったいものが巨大なゴキブリだと認識するまで約3秒。

ぺちん

「キヤアアツツツ!!!」

予想通りのサラ・ウォルシュの悲鳴に野次馬たちが楽しそうに笑った。



ゴキブリだと認識したのと同時に、目の前でピクンと揺れる、巨大ペニスの存在にも気づく。

「な、なにこの大きさ… うそでしょ…」

「こ、こんなの… 入らない… 無理よ… いや… いや…」

これから何が起こるのか悟った様子だ。

無理だなんだと言いながらも、抵抗したって蟲刑執行中なのだから逃げられるわけがない。サラ・ウォルシュにゴキブリが後ろ歩きで、じわりじわりと距離を縮めてくる。

「たいていの蟲は前に進むことしかできない。子宮を責め立てるのにびったりだろ。」

でもこいつは訓練をかさねて、後ろ歩きできるようになった。

「オテ」も「お座り」もできるぞ。

「チンチン」を覚えるが一番早かったんだよなあ。」

フーッ

フーッ



ゴキちゃんぽが割れ目をなぞる。
前に後ろに、サラ・ウォルシュのマン汁がちんこを濡らす。
それから、ゴキちゃんぽは狙いを定めるかのように、下腹部をたたいた。
サラ・ウォルシュの腕くらいある巨大チンポ。
これが本当に入るのか？









蟲刑人の笛が鳴り、ゴキブリのちんぽが引き抜かれる。



あと少しで果てそうになっていたサラ・ウォルシュはもどかしそうに息をついた。





そんな。まさか。
耳を疑うような言葉が聞こえてきた。
なんとサラ・ウォルシュはゴキブリちゃんぽを懇願しているのだ。
蟲刑人と僕にしか聞こえないような声で、口を小さく開いて必死に訴えている。

イカせてください...

カラダが...

うずいて...

たまらないんです...

ナニ...

だっ...
あま...
おあずけなんてムリに
決まってる...

わたしってこんな淫乱
だったんだ...

ゴキブリちゃんぽ
ナニがまだやらせる
んですけど...

しかし蟲刑人の返事は同じだった。
「聞こえないな。ここにいる人全員に聞こえるくらい大きな声で言ってくれよ。」



ぶつといゴキチンポください♡
私のスケバマン汁だらだら穴に
ハメてください♡
すぐイッちゃう雑魚まんこをなくさめて
ください♡♡♡

もうダメ♡

ガマンできない♡♡♡

はやく

オチンポ

ちやうだい♡

腰とまん♡

はやくはやく♡

オチンポオチンポ

オチンポオチンポ

オチンポオチンポ

いっっぱいジュポジュポ♡して♡
ゴキザーメン、子宮にびゅーびゅー♡
してください♡♡♡
奥までゴキチンポで満たしてえ♡♡

ゴキちゃんば最高なんです♡♡♡

「本性を現したな。サラ・ウォルシュ、お前は性欲にあらがえない。」
蟲刑人はかつこよくキメたが、本性を現したというよりも、
蟲刑人が調教して開発したのでは…?と思った。

蟲刑人はゴキブリをひっくり返す。

サラ・ウォルシュは自由に動くことを許された。
ふらふらとゴキブリに近づくサラ・ウォルシュの目はイッている。

蟲刑人の笛の合図でゴキブリがサラ・ウォルシュの股にちんぽをあてがうと、
サラ・ウォルシュ自ら、腰を落として、体を上下に揺らし始めた。



サラ・ウオルシュは本当に気持ちよさそうだ。
もうゴキブリが嫌い、という感覚はなくなっているみたいだ。

人間相手じゃないから
気つかわず腰ふれるっ♡

キスとか前戯とか
いらないしっ...！

それっ♡
それっ♡

おねだり♡

大好き♡

ゴキブリがこんな立派なペニス
もってるなんて知らなかった♡
ずっとこうしてたいっ♡♡



腰の動きが激しくなる。
舍房で会った時とは別人のようだ。
セックスの時ってこんなにタガが外れてしまうんだなあ。





ゴキブリの射精を受け、サラ・ウォルシュは腰を振るのをやめているが、まだ膣内では、ぬるぬるになったヒダが精液を吸い上げるようにゴキブリのペニスを包み込み、びくびくと刺激を与え続けている。ゴキブリはサラ・ウォルシュから離れたそうにジタバタし始めた。



蟲刑人がゴキブリの足をひっぱり、サラ・ウォルシュから引き離した。それから笛を吹くと、ゴキブリは茂みをつきつてどこか遠くへと走っていった。



「ゴキブリは終わりですか…。」

「ん？ そうだが？」

もっと見たかったのに、とは言えない。

「き、効いてたじゃないですか。」

「ご褒美与えずだ。このさじ加減がむずかしいんだぞ。きちんと苦痛を与えてフィニッシュさせる。」

もうやるべきことは終えた。

サラウォルシュ自身に性欲の深さを自覚させることができた。夫も含め周りの者に知らしめることができた。

自分は普通だとか、ちよつと魔が差しただけ、とか思ってる奴は再犯するんだよ。根っからスケベだつて認識してもらわないとな。

浅ましい女だよ。まだ腰を振ってるんだから。」

サラ・ウォルシュを見ると、ぐちゃぐちゃになった股を恥ずかしげもなくおっぴろげている。僕と違って、蟲刑人はムラムラしていないみたいだ。うゝん、プロフェッショナル！

と思いきや、蟲刑人はカバンを床に置き、ベルトをカチャカチャし始めた。
ズボンを脱ぎ、パンツをおろす。

なんだやっぱこの人も男だったのだ。

刑を建前に、綺麗な受刑者なら一発やっておくのだ。



「発やるんだな」と思ったら、おろしたパンツの中に大きな卵があった。

卵はニワトリの卵をそのまま大きくしたようなもので、直径は10cmくらいだろうか。パンツの中で温めていたらしい。

蟲刑人は卵を取り出して、パンツとスポンを履きなおした。

「何の卵ですか？」

「ヘビの卵だ。孵化寸前のな。これの中に入れるんだ。」



そう言っ、蟲刑人は手をマンコにつっこんだ。

「アクメまんこは下に下がる。
あらかじめ子宮口を柔らかくする薬を飲ませておいた。
触ったら分かるのさ。うん、柔らかくなっている。」

そんなことよりも、手首まで手がアソコにズッポリ入ってしまうのに僕は驚いていた。



蟲刑人は卵をマンコへと慎重にハメていく。
まばたき1つしない。
細心の注意を払っているようだ。

へビの卵というものは殻が柔らかいから、
自身の指の握り加減と、膣圧でひしゃげてしまうのだ。

卵は少しずつ入れられ、ゆっくりと膣内に収められていく。





卵は膣内にすっぽり入って見えなくなった。

「子宮に入れるぞ。」

蟲刑人はさらに奥へと卵を押し込む。

「ううっ……!! ……いた……い……」

サラ・ウォルシュの顔が苦痛で歪む。

「よし、入った入った。」

蟲刑人は手を入れたままだ。
指先の感覚だけで体内の様子を把握している。

「ゆっくり子宮口が閉じていってる。卵は完全に子宮に収まったよ。」

蟲刑人は手を引っこ抜いた。

「すごい。」

蟲刑人は蟲だけでなく、人間の体にも詳しい。



お腹がふくらんでいるのが痛々しいほど分かる。妊婦みたいだ。

サラ・ウォルシュの信じられないといった顔が、蟲刑人の思惑通りに歪んでいく。
「うそ……うそよ……うあああああん!!」
サラ・ウォルシュは泣きじやくった。まるで自分がこの世で一番の不幸かのように。

「こいつに出産経験はない。」
蟲刑人は僕に耳打ちをした。

サラ・ウォルシュの涙にはなにやら深い理由があるようだ。
犯罪者だけに同情してしまう。
へびなんて、クモとゴキブリと並んで見た目だけで嫌われている蟲だしね。

さつきまでは快感を伴う罰だったから、
蟲がウジャウジャでも、巨大ゴキブリがキモくても、エッチな感じだったけど…、
こんなに悲しみを露わにして泣かれたら、困っちゃうよなあ。

僕は気まぐしくなって観客を見てみたら、
半分くらいは同じように同情した目で見えて、
もう半分くらいの方はこれが大好物です!とキラキラした目をしていた。



「そろそろ、ヘビが内側から卵をつつついてるころかな。」

「うああああん!!!」

一段と大声で泣いた。大粒の涙が目頭と目尻の両方からこぼれ出る。身をよじって、本当に嫌そうだ。

「ぐすっ…グスッ…なんでえ…うえっ…ヒクッ…なんでこうなるの…グスッグスッ」
小さな声で呻きながら、泣くサラ・ウオルシュ。
その声は弱々しく、嫌悪感と苦しみ共鳴しているみたいだ。





「そろそろ、産まれたかな。」

「ひいっつ...!!」

サラ・ウォルシュは自分のヘソを見る。

ハク

ハク

ハク

ハク

ハク

ハク

ハク

ハク

あ、動いた！
妊婦の腹と同じように、お腹が中からポコポコ蹴られているのが見て分かった。

「へビは空気の振動を皮膚で感じ取るんだ。
お前の淫乱子宮がどんな形してるのかへビに感じてもらえ！
子宮が揺れて感じてるのバレバレだぞ！」

「違う！...感じてないいいい...うっ...こんなの気持ちいいわけない！
...気持ちいいわけじゃないじゃない...!!」



「産まれたばかりの赤ちゃんが、子宮の中を元気に動き回ってるぞぉ。」

サラ・ウォルシュは苦しそうに呻いた。

蟲刑人はサラ・ウォルシュの表情なんて気にせず、煽り続ける。
「おい、クソビッチ。
もっと声をあげないと観客のチンポがたたないぞ！」

「ぐうう…!! ぐる…じい…!!」

もっふんっ!!

イヤッ!?

「ああん? ナメクジとワームとゴキブリではアクメしてたのに、ヘビはダメなのか?
なんてワガママなんだ…」
蟲刑人は全く理解ができないようで、驚いた顔をしている。

「ぎもち…わるい…」





「アア…ッ!!」
サラ・ウォルシュが身をよじる。

「やだやだやだっつ…!!」
産まれるっつ…!!」

ぐにゅ

ポッ
ポコッ

蟲刑人は子供のように無邪気に応援する。
サラ・ウォルシュの顔は見ずに、おまんこに向けて声をかけている。

サラ・ウォルシュはわっと泣いた。

「へびちゃん、こっちおいで。
あー!! 顔が出ましたねえ!!」

天下凡

だめ

たぬえ

ナ

7

十

7/11

17

7

ナ

蟲刑人はカバンから鏡を取り出し、
股の様子を本人に見せた。

ほじられすぎて緩み、
くばあと開いた肉壺から、
へびの顔が飛び出していた。

へびにまぶたはない。
つぶらな瞳をして、
ピロピロ〜と舌を出したり引っ込めたりして
顔を色んな方向へ向ける。

「いやあああああつつつ!!!」



反射的に足を閉じようとしたサラ・ウォルシュ。

「開けえっ!!!」

蟲刑人は頬を平手打ちした。

「見ろッツ!!」

「うわああああああん…!!」

サラ・ウォルシュは足を開いて、子供のように大泣きする。
観客の熱気がピークに達した。

「すごいですね! バッチリダメージ与えてますね!」
僕も大興奮した。

ウウツツ

ぐちゅ

ぐちゅ



「それだけじゃねえぜ」
蟲刑人は鏡の角度を下向きに変えた。

太陽の光がチカチカと蛇に向けられる。
驚いたヘビは腹の中へ戻ろうと顔をオマンコにねじこんだ。

びくッ

びく
びく

へー
や
い
ッ

顔がマンコに入っても、長い長い体は外に飛び出したままだ。
二つ折りになったせいで膣が拡張される。





痛い

たけちゃんっ!
広げないでっ!

うううううう!!
もう...!
やだあつ...!!
たすけてええ!!

「あれえい？ サラ・ウォルシュの夫、カリド・ウォルシュの姿が見えなくなつたな。さては、ヒーターでも買いにいったかな？ かわいい赤ちゃんを育てるためのさ。」
「ううううう!!! いやよ...いや...ひどいわ...!! 私たちに子供がいないのを知ってるんでしょ...!!」

赤ちゃんへビは
すっかり体内へと戻ってしまった。



「おまんこ自分で広げろ。」

蟲刑人はサラ・ウォルシュの前にしゃがみ込んだ。
サラ・ウォルシュは震える手で大陰唇を広げる。

「産めよ。ほうら、ひっひっふー。ひっひっふー。」

蟲刑人の陽気な声に、サラ・ウォルシュは悲鳴を上げる。

「うえええん!!」



蟲刑人は一瞬だけため息をついて、次の瞬間には厳しい表情を浮かべた。

「はあ…話聞いている？ 泣くのは勝手だけどさ。まじでお前が腹に力入れて産まないと出てこないからね、へび。何？ ずーっと入れとくつもり？ へびのご飯どうすんの？ 餓死させたら殺すよ？」

「へ…」

サラ・ウォルシュが戸惑いの声をもらした瞬間、蟲刑人は声を張り上げた。

「産めって言うてんだろ!!!」



蟲刑人に脅されて、サラ・ウォルシュの出産が始まった。

「フウウウウウン!!!」

おでこに血管を浮かせて、お腹に力を込める。
その瞬間、おまんこが大きく開く。

♡
ハ
ッ

♡
ハ
ッ

ズ
ン
ッ

「あゝ顔見えたあ。可愛いへびちゃんだなあ！
それに比べて、汚ねえケツ穴だなあ！」
蟲刑人はそう言ったが、僕はサラ・ウォルシュの肛門は綺麗だと思った。

しかしサラ・ウォルシュが少し息を吸った瞬間に、蛇はまたお腹の中に戻ってしまった。

「何やってんだ！」
と蟲刑人が叫ぶ。

ウウッ

ウッ

グニッ

グニッ

ひくッ

ひくッ

ひくッ

ひくッ

ひくッ

蟲刑人に叱られ、サラ・ウォルシュは再び力を振り絞り、全身を震わせながら最後の力を込める。

「ウンコ漏らすなよ！」

「漏らしませんかから産ませてくだざいいいい!!!」

「足しっかり開け! 恥ずかしい格好で産め!!」

「ふうふう…!!」

うあああああああ…!!!

サラ・ウォルシュの叫び声が空に響き渡る。赤ちゃんが産まれるのは一瞬だが、体の長いヘビを産むものには時間がかかる。おまんこは、ヘビの体が全て出るまで最大サイズを維持し続けた。出産時のサラ・ウォルシュの顔は、ゴキブリにイカされている時と同じ顔をしていた。

ずるずる

ずる

ズル

へびの肌はぐつしよりと塗れている。
舌をシュルシュル出して、はじめての外界を感じ取っている。
蟲刑人が優しく捕まえてカバンに入れた。

おまんこはくっぽり開き切っている。

はぁ...こ

はぁ...こ

はぁ...こ



サラ・ウォルシュは力尽きて地面に倒れた。
虚ろな目をしてか細い息をたてている。
全身は疲労と痛みに包まれ、微かに動くことすら難しいようだ。

過度にいたぶるわけでもなく、ちようどの力加減で執行すべき蟲刑を行ったのだ。
蟲刑人は冷酷でありながらも、計算された優しさを持っていた。

クモに命令をして、今更ながら手足を縛り始める。

「逃げたりしないと思いますけど…」
と僕がつぶやく。

「そのためじゃねえよ。
…たまにな、反省のあまり、自殺する奴がいるんだ。」
蟲刑人はサラ・ウォルシュを見下ろしながら続けた。

日が暮れるまでまだ5時間くらいあるからな。
それくらい時間がたてば、いろんな感情を通り越して諦めの境地にいくんだが、
それまで死なれないように縛っておくんだ。」



クモが拘最後の結び目を締めると、巨大な虫はびつちりと縛られた。
足が無力に広がっている様子は、哀れに見える。

その瞬間、しゃあああああ...とおしっこが飛び出した。
地面を濡らし、少しずつ広がっていく。

そういえば、僕もそろそろおしっこに行きたい。
刑務所を離れてから数時間たっている。

サラ・ウォルシュはおしっこが出ていることに気づいていなかったみたいだ。
おしっこの勢いが弱まって、太ももをビチャビチャと濡らし始めて、
自分の体からおしっこが漏れていることに気づいたみたいだ。

アソコが完全にゆるんで、感覚がないのだろう。
ビッチマンコは正当に処罰された。



「はあ…はあ…
うっ…!! うう…!!!」
サラ・ウォルシュの目から、大粒の涙が次々とこぼれ落ちる。

僕にしか分からなかったと思うが、
サラウォルシュの口が「ごめんなさい…」と動いたように見えた。

涙と共に、その声もまた、
サラウォルシュの心の奥から絞り出されたものであり、
夫への謝罪、懺悔がにじみ出ていた。

蟲刑と呼ばれるこの刑罰、
そしてそれを執行する蟲刑人はすごい。
すっかり人を改心させてしまったのだから。



「これに懲りたら、もういろんな男のチンポを求めないことだな。」

蟲刑人はカバンに鍵をかけながら言った。
それから、「呼吸おいて、

「まあ、こんな、蟲の入ったきたねえマンコなんて、誰も入れたがらないだろうがよ！」
とトドメをさした。

むあぁ...



もういいだろ！と僕は心の中でつつこむ。
心の中を見透かされたのか、蟲刑人はけわしい表情をした。

「こうやって相手を傷つけるのも俺の仕事だ。普段から、
人がどういわれたら傷つくか、とか考えたり、
なじる言葉をストックしておくといい。」



容赦のなさは蟲刑人にとって必要なことだ。
変に情けをかけたなら、きっと罪人は「不可抗力だった」とか言い訳を作り始める。
きっちり反省させるにはトコトン厳しくが正解なのだ、と蟲刑人は語った。

「次は観客のターンだ。」

僕と蟲刑人がサラ・ウォルシュから少し離れると、反対に観客たちが近づいてきた。はじめからいた人もいれば、刑が終わった頃を見計らって来た人もいる。

だから、今が1番人が多い。

「僕みたいな子供も見に来るんですね？」

真面目そうな母親が娘の両肩を後ろから持って連れてきている。また、サラ・ウォルシュを囲む人混みの1番後ろに混じって、隙間から子供に見せようとしている親もいる。

僕はこれまで、蟲刑は遠目でやってるなりくらいにしか認識していなかったのに、積極的に見にくる人もいるのだと知り、家庭の違いに驚いた。

「『あんなっちゃいけません！』って教える格好の機会だからな。サラ・ウォルシュにとっても良い罰になるんだ。ポロポロになった姿を、綺麗な心をもった子供に見られる、というのがまともな人間には一番きついんだ。」





蟲刑人は僕がメモを取るスピードに合わせて、説明を続けた。

「なぜ公開処刑されたのかその意味を考えてほしい。
きちんと処刑が行われたかどうかは国民が判断する。
公務員である蟲刑人がきちんと仕事を果たしたかは、国民が判断するのだ。

観客はサラ・ウォルシュを上から見下ろす。

びろんびろんになったおまんこを見る。

この国の秩序を守るために、法が、罰が、必要だと再認識する。

そのための時間だ。」



蟲刑が終わってから何時間も立ち、日が暮れ始めた。
クモがサラ・ウオルシュを拘束していた糸を静かに回収していく。
木陰で休んでいた僕たちは、サラ・ウオルシュがどうなったか見るため腰を上げた。

サラ・ウォルシュは長時間足を開きすぎて、体が固まってしまったみたいだ。
おまんこ以外も肉体的にかなりしんどい刑だったみたいだ。
野生のアリが体にたかっている。

「服を返しとかなないとな。」と蟲刑人が言い、
サラ・ウォルシュの体の上にポンと服を置く。
それをのクモが拾って器用に着せていった。
足が8本もあると色んなことができるのだなあ。

サラ・ウォルシュは、壊れた人形のようにぼんやりと宙を見つめていた。



観客もほとんどなくなっている。

「これにて蟲刑終了!! 罪は許された。
サラ・ウォルシュ、償いは終わった。もう自由にしていぞ。」

その言葉を聞いて、サラ・ウォルシュの夫が駆け寄ってきた。
彼はサラ・ウォルシュに付いたアリを払い落す。

サラ・ウォルシュは夫の肩をかりて、よろよろと立ち上がる。

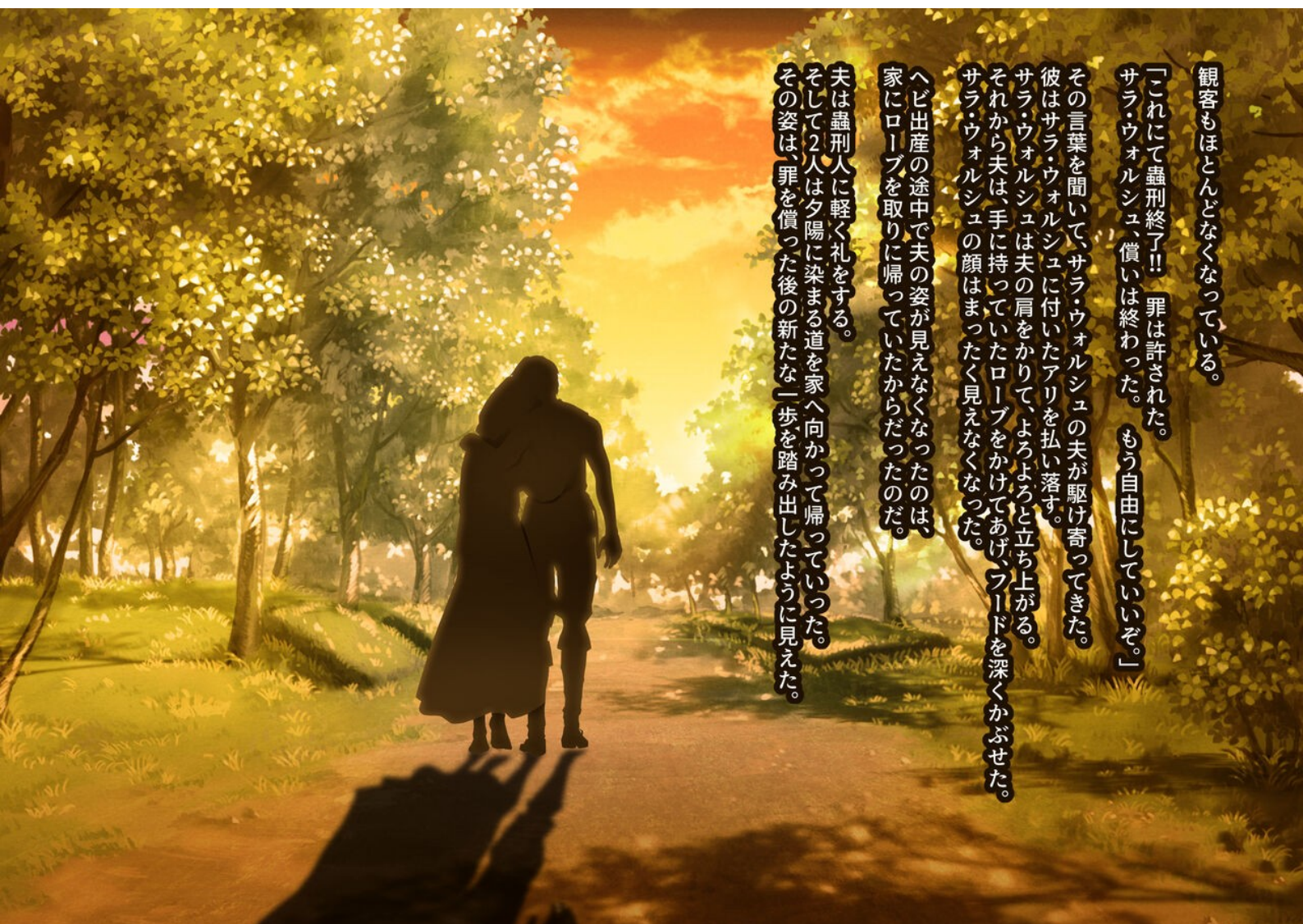
それから夫は、手に持っていたロープをかけてあげ、フールドを深くかぶせた。
サラ・ウォルシュの顔はまったく見えなくなった。

ヘビ出産の途中で夫の姿が見えなくなったのは、
家にロープを取りに帰っていたからだだったのだ。

夫は蟲刑人に軽く礼をする。

そして2人は夕陽に染まる道を家へ向かって帰っていった。

その姿は、罪を償った後の新たな一步を踏み出したように見えた。





「夫さん、優しいですね…。蟲刑で妻があんなに酷く痛めつけられちゃって、夫さん傷ついたんじゃないですか？夫さんは浮気されて…。1番の被害者なのに…。」

「大丈夫だ。」

蟲刑人はため息と共に軽く流すように言った。

「なんでそんなの言い切れるんですか！」

「あの夫は昔、魔薬の売買で捕まっている。
あの夫、サラ・ウォルシュに媚薬を飲ませてたと思うぜ。
美容に良いとか適当に騙くらかせば、あの女は素直に飲むだろ。
蟲刑前、薬を飲ませた時、かなり慣れた様子だった。」

「えっ」

僕は記憶をたぐりよせる。確かにそうだったかもしれない。

「浮気現場を押さえたのも夫だろ。
たまたま仕事がキャンセルになって早く帰ってきた、って言ってたけど、
あいつ、日頃から遠征なんかしてない。」

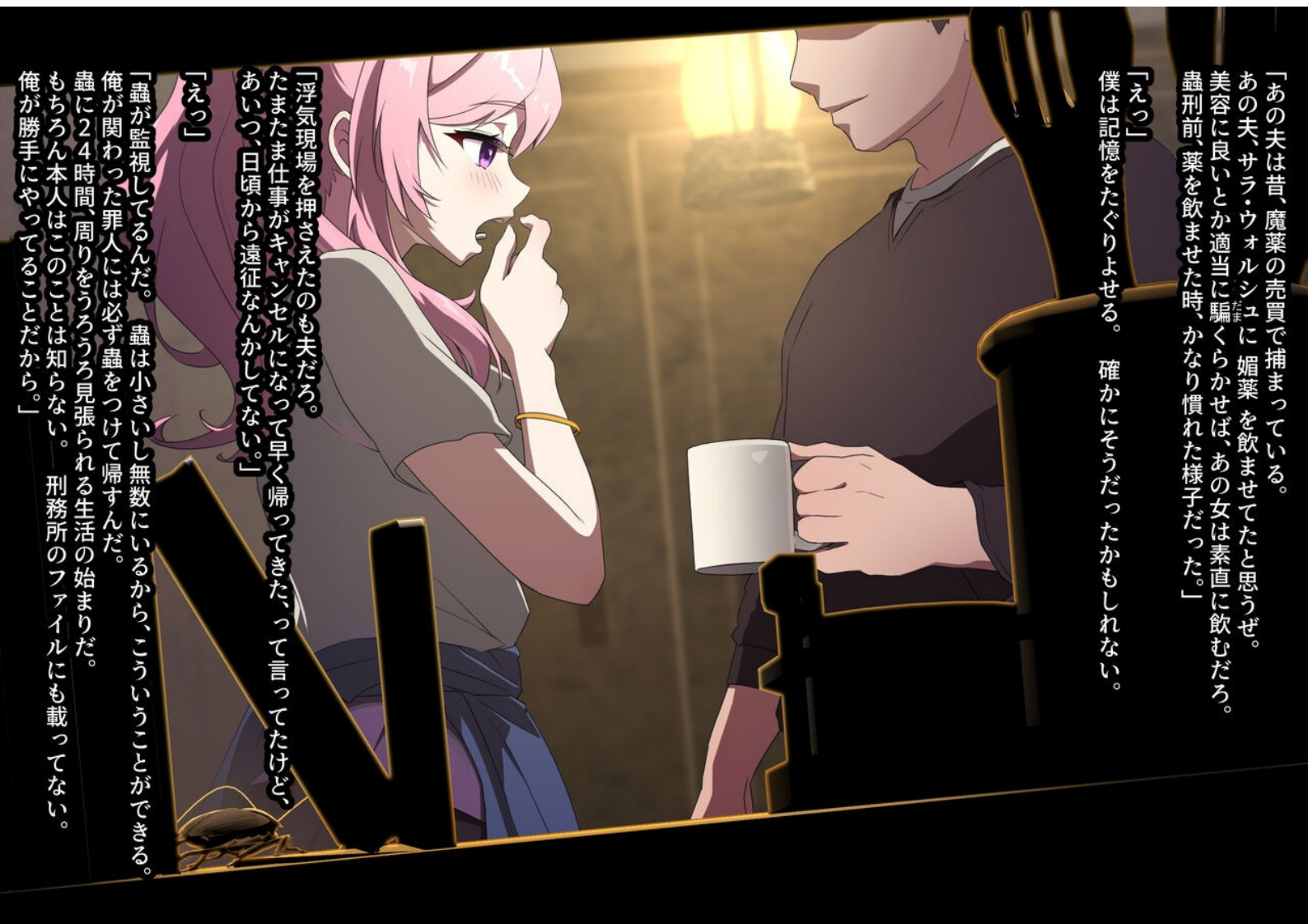
「えっ」

「蟲が監視してるんだ。蟲は小さいし無数にいるから、こういうことができる。
俺が関わった罪人には必ず蟲をつけて帰すんだ。」

蟲に24時間、周りをうろうろ見張られる生活の始まりだ。

もちろん本人はこのことは知らない。刑務所のファイルにも載ってない。

俺が勝手にやってることだから。」



「ええ…、それじゃあ、夫は妻に媚薬をわざと飲ませて発情させて、浮気しやすくなるように仕向けてたということですか？　なぜ…」

「夫の遠征はいつも近場だ。数時間出かけたらずぐ家に戻っている。」

「えっ」

「見てたんだよ、妻が他の男とやってるところを。」

「ええっ」



「そんなのに興奮する性癖ってのがあんだよ。
今日はさぞかし興奮しただろうな。嫁が蟲にめちやくちやにされて。
観客がたくさんいて、職業体験のガキまでいてよ。」

「なっ…!めちやくちや悪いやつじゃないですか!!」

「妻に媚薬を飲ませるのは違法じゃねえだろ。
パコったのはサラ、ウ、オルシュの判断だ。」

「そんな…」



「サラ・ウォルシュは罪を償った。
そして優しい夫をますます好きになる。それでいいだろ。」
蟲刑人は淡々と言った。

「で、でも、また媚薬をもらったら… また不倫しちゃうんじゃないですか!？」
僕は問い返した。

「君は心配性だね。」

蟲刑人は西陽を背にして振り返った。
その瞬間、蟲刑人の姿がシルエツトとなり、表情は見えなくなる。

「俺が担当した受刑人の再犯率は0%だよ。」

蟲刑人の自信に満ちた背中に大きなクモが飛びつく。
オレンジ色の光の方へと蟲刑人は去っていった。

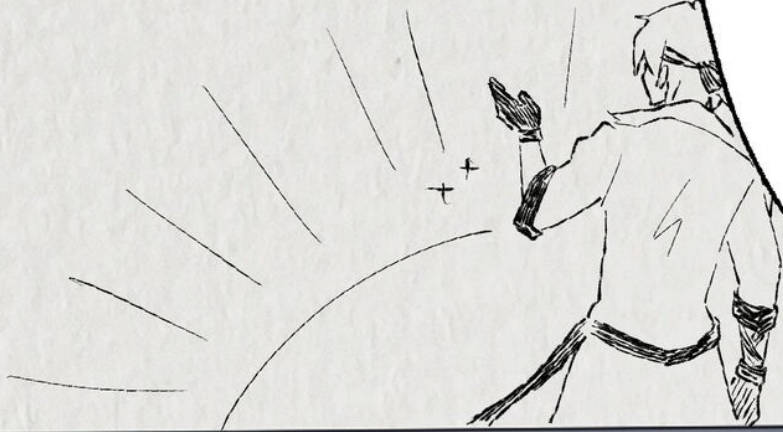
ここで僕の職業体験は終わった。
『蟲刑人の仕事は完璧だ。罪人を確実に更生へと導く。これまでも、これからも。』
そうメモをしめくくって、僕も家に帰った。



Özet.

Öz Mantel cezasının ağırlıklarında hem şeker hem de kakaoya
önem verildi. Breck cezası sayesinde halkın kulaklarına
kakaonun bakımı ve atılması. Nijili'nin kakaoya olan
ve ağırlık işleri topluluğun gelişmesine yol açtı.

まとめ。
蟲刑は飴と鞭を使い分けることが大事。
蟲刑のおかげで、みんながこの国のルールを守る。
蟲の世話や研究、なじりのワードセンスなど、
地味で細かい一つ一つの仕事で、社会を良くすることに繋がる。



感想。
 蟲刑人の役割と責任を理解できました。
 以上が、僕の職業体験です。

でも、僕は将来、蟲刑人にはなりたくありません。

職業体験中に、クワガタムシのつまむところを間違えてしまったからです。本当は胴なのに、ぼくは顎をつまんでしまったんです。

でも、僕は将来、蟲刑人にはなりたくありません。

職業体験中に、クワガタムシのつまむところを間違えてしまったからです。本当は胴なのに、ぼくは顎をつまんでしまったんです。





それですごく怒られてしまい、
『つまむ場所が違う!!』と、このような罰を受けてしまいました。

しり

蟲刑人になるためには、先輩のこういった指導を受けて一人前になっていくそうです。蟲の力を自分の体でも確かめる必要があるからです。その点、僕は乳首をつままれただけでおかしくなってしまうので僕には到底なれそうにないお仕事です。



でも、蟲刑人さんに言われました。『お前は絵が描けるから、記録係として同伴しないか?』と。すごく嬉しかったです。これからも週末は蟲刑に参加させてもらえることになりました。これにて発表を終わります。

●クレジット●

▶特別寄稿イラスト

めめもりあきら 様



エチコ 様



▶スペシャルサンクス☆

(クラウドファンディングで制作費をご支援いただいた皆様に心より感謝申し上げます。)

ゼス 様

Shiver 様

Kogetuki989 様

通行人A 様

ボテ腹・異種姦大好きな人 様

触手スキー 様

ぬいぬい 様

ざわもん 様

woo 様

無名 様

アルゾ 様

sugar5mg 様

butatama 様